

大学教育開発研究シリーズ
NO.20 ● Mar. 2014

アクティブな学びをデザインする vol.3

—2学部における初年次演習科目の実践から—

立教大学
大学教育開発・支援センター

ISSN 1881-1035

アクティブな学びをデザインする vol.3

—2学部における初年次演習科目の実践から—

立 教 大 学

大学教育開発・支援センター

はじめに

立教大学では、経営学部のBLP (ビジネス・リーダーシップ・プログラム) をはじめ、各学部の授業において数多くの先進的な取り組みが行われているにもかかわらず、学内外を問わず、その実態はあまり知られていない。特に初年次生に対する少人数授業は、各学部が工夫を凝らし、また苦労を経験し、特色がよくあらわれている。今回の授業見学およびそれに続く意見交換会(ワークショップ)は、その「実態」に迫るべく企画されたものである。授業の目的、学生の反応、運営上の問題点、各授業での工夫、改善案等について、学部を超えて情報交換や意見交換を行って、認識されている問題への対策や授業改善に向けたヒントを見出すことが期待された。もちろん、全学部の先進的な取り組みを見学し、紹介できれば良いのだが、今回は、異文化コミュニケーション学部と経済学部の2学部における初年次生向け授業に御協力いただいた。

異文化コミュニケーション学部では、一年生全員が参加する基礎演習において「協同学習」という教授法を組織的な取り組みとして展開している。おそらく「協同学習」とは何かということについてはあまり正確に知られていないのではないだろうか。「協同学習」は旧来の単なる「グループ学習」とは異なる。筆者も今回のワークショップを企画するにあたって初めて詳細に理解することができた。ここでは「協同学習」とは何かについて説明することはしないが、本報告書においてその一端を疑似体験していただきたい。

そして、経済学部では、「基礎ゼミナール」という授業において、初年次生に少人数教育を行っている。前期に日本語の文献を用いて、輪読、ディスカッション、レポートの作成・プレゼンテーション等を行うが、つい最近まで高校生だった彼らは、当初、その授業形式になかなか馴染めず、戸惑う。そして、この「ゼミナール」に慣れてきた後期には、英文教材を用いて、経済(学)の概念や基本的思考法を教授している。後期は、いわゆる専門教育に類する経済(学)に関する文章を扱うということに加えて、それが英文であるという壁も加わるのである。当然、学生たちは相当の努力を求められるが、授業を成功裏に終わらせるためには教員にも相当の手腕が求められる。今回はその後期の一コマを見学させていただいた。

「実態」を知る上で、ありのままの授業を見学することには意義がある。もちろん、見学者がいることで学生たちは若干緊張しているが、普段通りの、飾らない授業風景を見学させていただくことができた。そのおかげで、本報告書には授業の「実況中継」としての要素も含まれている。教員が学生にどのように声をかけているのか、それを受けて学生がどのように行動しているかがよくわかる。授業経験の豊かな教員もそうでない教員も得るところがあるはずである。授業の力強い骨格を構築することと、現場でしなやかに展開することの両方の要素がいかに大切であるかが、手に取るようにわかるのではないだろうか。大学での授業実践の記録として大変貴重な機会を得ることができたと思う。このような貴重な機会を提供してくださった教員と学生の皆さんに感謝申し上げたい。

大学教育開発・支援センター副センター長、経済学部准教授

小澤 康裕

はじめに 小澤 康裕

第1部

協同学習のプロセス

—グループ・ワークで伸ばす問題発見、論理的思考、コミュニケーションの力—

1. 第1回FDワークショップ(授業見学)概要	8
1) 授業見学	8
2) 意見交換会	9
2. 異文化コミュニケーション学部における初年次演習科目(基礎演習1・2)概要	10
1) 目標と授業計画等	10
2) 授業スケジュール	11
3. 見学当日の授業	12
1) 構成	12
2) 高先生の発言	13
①協同学習の導入部	
②グループ発表準備の指示	
③学生相互のフィードバックの指示等	
4. 授業の基盤となるルール—配布資料より—	18
1) 予習の仕方	18
2) 協同学習のすすめ方	19
3) フィードバック用紙	20
5. 協同学習における学びと可能性	
—学生のディスカッションを見学して— 御手洗 明佳	21
1) 協同学習の特徴	21
2) 教員による「場」の設定	21
3) 知識の統合・適用	22
4) まとめ	25
6. 意見交換会	26
1) ワークショップ当日の意見交換会	26
2) 書面による質疑応答	33
参加者の声 1 孫 齊庸	38
参加者の声 2 西原 廉太	40

第2部

英文教材を用いた経済学的思考の訓練

—経済学部「基礎ゼミナール2」の取組み—

1. 第2回FDワークショップ(授業見学)概要	44
1) 授業見学	44
2) 意見交換会	45
2. 経済学部における初年次演習科目(基礎ゼミナール1・2)概要	46
1) 目標と授業内容等	46
2) 授業スケジュール	47
3. 見学当日の授業	48
1) 構成	48
2) 当日の授業の様子	49
①課題英文の概略	
②導入部での関根先生の発言	
③ディスカッションでのやりとり	
④締めくくり	
4. 共通テキストの目次紹介	52
1)『基礎ゼミナールハンドブック』(立教大学経済学部編)	52
2)『Economic Affairs and Economics in English』(立教大学経済学部編)	53
5. 意見交換会	54
参加者の声 1 大森 愛	72
参加者の声 2 小澤 康裕	74
おわりに 家城 和夫	76

第1部

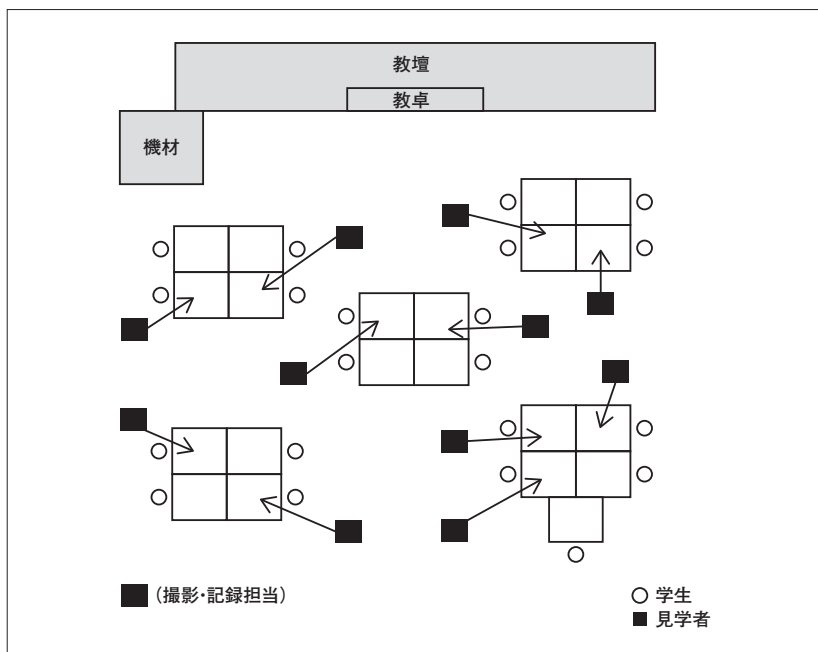
協同学習のプロセス

—グループ・ワークで伸ばす問題発見、
論理的思考、コミュニケーションの力—

1. 第1回FDワークショップ(授業見学)概要

1) 授業見学

- <授業科目> 基礎演習2 (異文化コミュニケーション学部)
<授業担当> 高みか先生 (異文化コミュニケーション学部 助教)
<開催日時> 2013年11月13日(水) 13:15~14:45 (3限)
<出席学生数> 21人
<見学者数> 12人
<見学方法> 4~5名の小グループで行われるディスカッションの過程を間近で見学するため、見学者は学生の背後に着席して見学するスタイルをとった。教室内の配置を図示すると下記ようになる。なお、授業運営の都合上、見学者数には定員を設け、定員を上回る申込みがあった。



2) 意見交換会

<開催日時> 2013年11月13日(水) 14:45～15:05

意見交換会には、授業担当の高先生に加えて、基礎演習2の科目統括者である山田久美子先生(異文化コミュニケーション学部教授)にもご参加いただいた。意見交換会の内容は「6. 意見交換会」(P.26～)を参照されたい。また後日、書面での質疑応答も行った。その内容も同節に掲載した(P.33～)。



2. 異文化コミュニケーション学部における 初年次演習科目(基礎演習 1・2)概要

1) 目標と授業計画等

同学部の初年次演習科目における目標等を以下に示す。今回見学した基礎演習 2 だけでなく、前期開講の基礎演習 1 についても合わせて掲載する。

◆基礎演習 1

前期 / 2 単位 / 自動登録 (全員履修)
◇授業の目標 大学で学ぶための基礎となる論理的思考、情報リテラシーを身につけ、コミュニケーション力、情報受信・発信能力、問題解決能力を向上させる。
◇授業の内容 「協同学習」の方法論を用い、論理的思考スキル、言語スキル、対人関係スキルを学ぶとともに、タイム・マネジメントを習得する。また、議論や発表のスキルとともに、ノン・バーバルコミュニケーションへの意識も高める。
◇授業計画 「協同学習」では、課題テキストをもとに、授業で少人数グループでの議論を行う。課題テキストは、授業内で解説する予習の仕方に従って、学生自身が予習してくることを前提とする。授業では、テキストの内容を正確に把握し、それについての自分の意見を論理的に発言する練習をする。グループディスカッションでは、他人の意見を聞き、それに対してコメントをする「議論の方法」を身につける。また、レポートの書き方について、解説とトレーニングを行う。
◇成績評価方法 授業参加度・レポート (40%)、協同学習フィードバック (30%)、予習ノート (30%)

◆基礎演習 2

後期 / 2 単位 / 自動登録 (全員履修)
◇授業の目標 「基礎演習 1」で身につけた力をさらに伸ばし、情報リテラシー、論理的思考を磨き、さらに、議論、発表、レポートなど、それぞれに適切な形で発信する方法を身につける。
◇授業の内容 前期の「協同学習」形式を継続し、3つのタスクを柱に論理的思考、議論の方法、口頭発表およびレポート執筆の方法を身につける。
◇授業計画 後期の「協同学習」は、次の3つに重点を置いて行う。 1) 課題テキストの予習 (テキスト内容の正確な理解とそれに対する自分の意見の構築) 2) ディスカッション (他者の意見を聞き、自分の意見を論理的に述べ、議論を深める) 3) 課題のテーマに関連するトピックについて調査、考察し、口頭発表、および小レポートをまとめる (口頭発表は、グループで議論し共同で完成させる。各自が自分のテーマについて書く小レポートは、互いに評価・批評することで、レポートを書く方法、論理的な文の書き方について学ぶ)
◇成績評価方法 授業参加度(発表を含む) + 出席 (30%)、ミニ・レポート (10%)、課題図書レポート(夏の宿題) (10%)、協同学習フィードバック (20%)、最終レポート (30%)

注) 同学部の「講義内容」冊子(2013年度)より抜粋して作成。ただし、成績評価方法はガイダンスでの配布資料(全担当教員共通)を参照した。

2) 授業スケジュール

基礎演習1ならびに基礎演習2のスケジュールは以下の通りである（ガイダンス資料より）。網掛けした基礎演習2の第6回が今回見学した授業である。

◆基礎演習1（全担当教員共通、前期）

1	4/10	ガイダンス	
2	4/17	協同学習①-1	初見のテキストで協同学習
3	4/24	// -2	予習をしたうえで協同学習
4	5/8	協同学習②-1	予習をしたうえで協同学習
5	5/15	// -2	先生のコメントをふまえて2回目の協同学習
6	5/22	協同学習③-1	予習をしたうえで協同学習
7	5/29	// -2	先生のコメントをふまえて2回目の協同学習
8	6/5	レポートの書き方①	トピックと情報の見つけ方（図書館の使い方）
9	6/12	グループ発表①-1	グループでテーマを決め、発表準備
10	6/19	// -2	クラス内リハーサル。全グループ（各10分）
11	6/26	// -3	3グループが発表（各10分）
12	7/3	// -4	2グループが発表（各10分）
13	7/10	レポートの書き方②	ゲスト：セカンドステージ学生 (50歳以上のシニア向け履修証明コースの在学者)
14	7/17	レポートの書き方③	

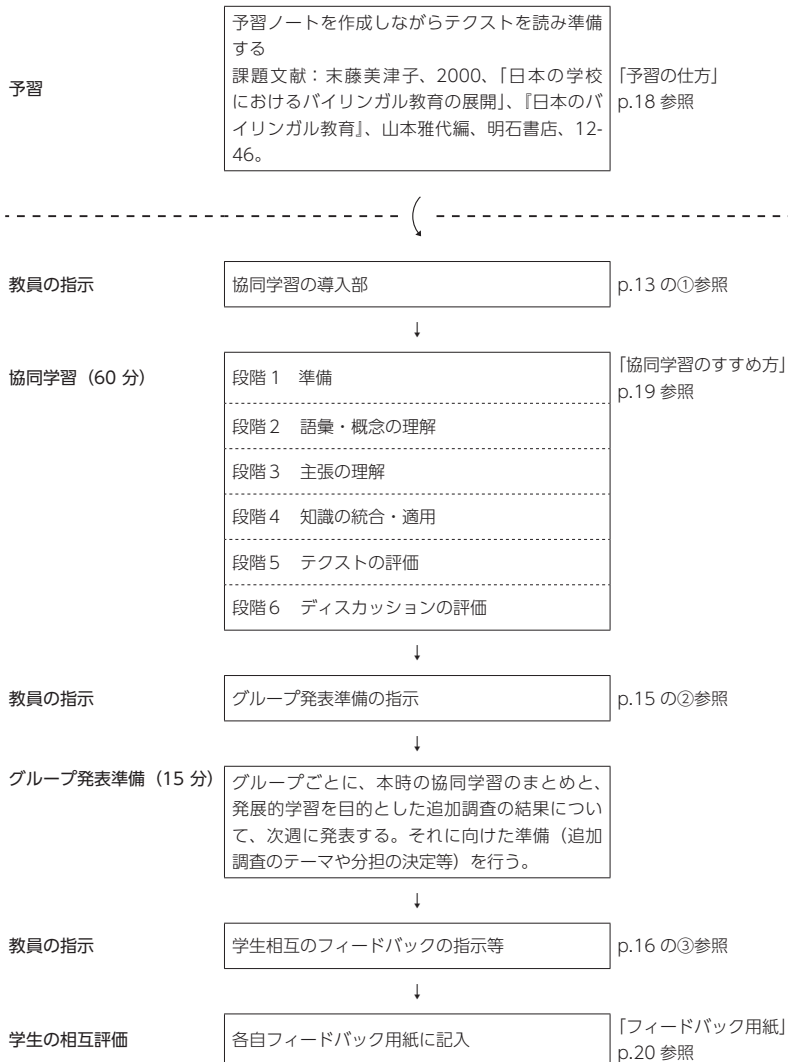
◆基礎演習2（全担当教員共通、後期）

1	9/25	ガイダンス 講演会プレワーク	ガイダンス、夏のレポート提出 夏のレポート要旨グループ発表+ディスカッション 講演テーマについて、協同学習+講演者への質問を考える
2	10/2	講演会	高 賛侑先生 講演会
3	10/9	講演会アフターワーク①	講演について意見交換、関連した資料（本、論文など）を持ち寄り 紹介（宿題：講演に関してミニ・レポートを書く）
4	10/30	講演会アフターワーク②	各自のミニ・レポートに基づいて協同学習+グループ学習 ミニレポートは互いに評価
5	11/6	レポートの書き方	夏のレポート返却
6	11/13	協同学習①-1	協同学習（60分）+グループ発表準備（15分）
7	11/20	// -2	グループ発表（50分）+ディスカッション（30分） 宿題：ミニ・レポート
8	11/27	// -3	ミニ・レポート グループ内で発表（15分） 互いに読む+ワークシート記入（45分）
9	12/4	協同学習②-1	協同学習（60分）+グループ発表準備（15分）
10	12/11	// -2	グループ発表（50分）+ディスカッション（30分）
11	12/18	最終発表準備	グループ発表準備：テーマ+グループを決定、各グループで準備
12	1/8	クラス発表会	クラス内でグループ発表（各グループ10分）
13	1/15	クラス・シャッフル	クラスをかえてグループ発表
14	1/22	統合	フィードバック

※網掛けはワークショップ当日

13. 見学当日の授業

1) 構成



2) 高先生の発言

① 協同学習の導入部

○高 では、今日の授業を始めたいと思います。今、大学教育開発・支援センターの方から挨拶があったと思いますが、みんなが熱心にディスカッションをしているところをほかの先生に見ていただくということなので、いつもどおり、緊張しないでやってください。

今回、後期最初の協同学習になります。前期でもう何度かやっているのですが、手順は頭に入っているかもしれないけれども、後期は3回の授業を1セットにして協同学習を行います。前期とはちょっと違うので、その点も含めて手順と注意事項を簡単に復習しておきましょう。

今日は3回セットのうちの1回目になります。今日の授業に向けて、みんな課題の文献をしっかりと読んで、予習ノートもがっちり仕上げていると思いますので、まずは60分間、ディスカッションをしてもらいます。発表係、時計係、記録係、司会係を決めて、みんなに配ったプリントに手順が書いてあると思いますので、手順どおり、時間を計って議論をしてください。

ディスカッションの注意事項を思い出してください。ディスカッションで一番大事なことは、人の話をしっかりと聞くこと。あとは自分が発言するときも、予習ノートを読み上げるのではなく、ちゃんとグループの人たちとアイコンタクトを取って、みんなに話しかけるようにしてください。いい意見があったなと思って、ノートを取りたいなと思うこともあるかもしれないけれども、ノートを取ることに集中するのではなく、話している人の話を聞いて、リアクションをちゃんとするようにしてください。

次に、これはもうみんな、100%分かっていると思うけれども、全員が発言すること。これは司会係と時計係がしっかりとコントロールをしてください。1人ずつ発言する場合には、時間が決まっていると思いますが、それよりも長くても、それよりも短くても駄目です。ここは司会係と時計係がしっかりと確認しておいてください。同じような意見がもう出されちゃったから、「同じです」と言うのは厳禁です。自分の意見がほかの人と同じであっても、自分の言葉で必ず言い直すようにしてください。

最後に、私はみんなの前期のディスカッションの様子は見てこなかったけれども〔注：前期「基礎演習1」と後期「基礎演習2」は異なる教員が担当する〕、

私が別のクラスでやっていたときに、ディスカッションで一番難しかったのは、みんなが一人一人、自分の意見を言って、「ああそうだね」、「そうだね」と、そういうことはちゃんといえるんだけど、そこからなかなかディスカッションに発展させられない。だから、「自分はそれとはちょっと違う意見を持ったよ」とか、「誰々さんと誰々さんの意見がちょっと違うから比較してみようか」とか、幾つかの問いを立てながら、発展的なディスカッションになるように一人一人が貢献してください。

ここまでOK？前期は60分間の協同学習の後、各グループからディスカッションの内容を発表してもらったと思いますけれども、今学期は、1回目の授業では、発表はありません。ですから今日は、発表はありません。発表は来週の授業の最初にしてもらいます。今日の授業は、60分間のディスカッションが終わったら、来週の発表に向けての準備を15分間してもらいます。この15分間の準備については、協同学習が終わった時点でまた詳しくお話しするので、まず60分間の協同学習を始めてください。今、1時20分なので、2時20分まで。

(各グループで握手によるアイスブレイクを行い、すぐに教室内にディスカッションの声が広がる)



異文化コミュニケーション学部 高みか助教

②グループ発表準備の指示

○高 はい、60分たちましたので、一度これでやめてください。

これから来週に向けてのディスカッションを15分してほしいと思います。まずは今日、どんなディスカッションをしたのか、どういう視点がみんなの中から出てきたのかということをもとめてください。その今日の議論を踏まえて、じゃあどういふうに発展的に、さらに調べていくことができるのか。グループの中で1つ問いを立ててください。

いろいろな問いの立て方ができると思います。この文献は2000年に書かれたものですから、2000年以降、どういう政策があったかとか、NGOなどのバイリンガル教育でどのようなものが行われたかといった問いも可能だし、あとはどこかのグループで、アイデンティティーと言語と文化という問題をディスカッションしているところがあったけれども、そういう問題をさらに発展させてもいい。別のところでは、自分が海外で受けた英語教育と日本語教育について語っているところもあったので、そういう、自分たちの中から、ディスカッションの中から出てきた面白い視点を1つ取り上げて、問いを立てるようにしてください。今、私が言ったことはみんなすごく大きい問いだから、もっともっとフォーカスして、小さな問いをグループで決めること。

その後にするのは、その問いに答えるために、どういふうに調べる必要があるか。その調べることを決めて、1人1つのトピックを、来週は調べてきてください。1つの問いに答えるためには、幾つか調べることがあるよね。だから、その一つ一つをグループのみんなで割り当てて、じゃあ自分はこのことを調べてくる、自分はこのことを調べてくるというふうに分けてください。じゃあ今から15分で、今日のディスカッションの振り返り。どういふうに視点が出たか。さらに発展的に議論するためにどういふうに問いが立てられるのか。その問いに答えるためには、どういふうに調べていく必要があるのか。じゃあ15分間で、もう一度ディスカッションしてください。記録用紙は来週回収します。

(グループ発表準備のディスカッション)

③学生相互のフィードバックの指示等

○高 はい、やめてください。もし、まだ役割分担が終わっていないのであれば、授業の後にやってください。

来週は、さっきも言ったように、まず今日決めた発表係が、今日のディスカッションのサマリーを3分間します。その後に、各自、1人ずつ調べてきたことを1分ぐらいで発表してください。1つのグループの持ち時間が8分ですので、1分になるか、1分15秒になるかは、自分たちで判断してください。さっきも言いましたが、1分間で話すことを調べてくればいいというものじゃないですよ。インターネットの情報だけに頼らずに、必ず図書館に行って、幾つかの文献にあたって調べてきてください。

先週のレポートの書き方のところで、みんなで復習したように、必ず議論であるとか、自分の考えというものは、証拠であるとか、例であるとか、典拠を出してサポートしてくるようにしてください。発表の場では1分しか話すことはないけれども、その後またグループディスカッションとクラス全体のディスカッションがあるので、言い切れなかったことをそのときにどンドン話して、さらにディスカッションを活性化するようにしてください。

じゃあ、今からフィードバック用紙 (p.20 参照) を記入してもらうので、机



フィードバック用紙の記入は机を離して行う

をもとに戻してください。今、自分たちが座っているところだけもとに戻して。
(机の移動)

じゃあ、今日のグループディスカッションと自分の予習具合、あとグループのメンバーの予習具合を振り返って、フィードバック用紙に記入してください。前期のときに何回も言われていることだと思いますけれども、自分の評価を不当に低くしないように。自分でちゃんと予習をしてきて、議論にもしっかりと参加できたと思うときは、迷わず高い点数をつけてください。グループのメンバーに関しても、客観的に評価をするように。ちゃんと予習ができていたかなとか、ディスカッションに貢献したかなということを、正當に判断してください。原則として、同じ番号はつけない。グループのなかで、自分の評価も含めて、ゼロから10で評価すること。それは同じ番号（評価）をつけない。

(記入)

(チャイム)

じゃあ、フィードバック用紙が書けた人から帰って下さい。来週の発表を楽しみにしています。

4. 授業の基盤となるルール—配布資料より—

1) 予習の仕方

「協同学習」予習の仕方

☆基礎演習専用の「予習用ノート」を用意する。

協同学習では予習が大変重要です。①から⑥の順序で「予習用ノート」に整理して書き、⑦のリハーサルをした上で、授業時のディスカッションに参加して下さい。

① 全体像の把握

- ◆ 線を引きながら（最重要＝「赤線」、重要＝「青線」、興味・関心のある／疑問をもった箇所＝「緑線」等）全体が理解できるまでテキストを読む。
- ◆ 読めない漢字、初めての言葉や固有名詞、意味が曖昧な表現をチェックする。

② 語彙・概念・背景の理解

- ◆ ①でチェックした言葉・概念・固有名詞の意味を調べ、ノートに整理する。
- ◆ 調べた内容を言葉の意味を正しく説明できるように準備する。
何を参考に調べたのか、その出典もノートに書いておく。
調べても分からないものはディスカッション中に聞く。→質問をまとめておく。

③ 著者の主張・話題の理解

- ◆ テキストを精読し、全体を通した著者の主張を「自分の言葉」でまとめる。
著者の主張を受容し、ここでは自分の意見や批評を加えない。
テキストから「抜き書き」はしない。
- ◆ テキストに含まれる話題を見つけ、話題ごとに「自分の言葉」でまとめる。
中心的な話題を選ぶ。複数選んでもよい。

④ 知識の統合

- ◆ 著者の主張や話題（A）と、他の関連する情報や調べて得られた情報（B）を結びつける。
- ◆ AとBの両者を比較検討し、類似点や相違点などをまとめる。

⑤ 知識の適用

- ◆ ④のA+Bの内容を、自分自身の日常生活に直接関係したもの（自分の人間関係、自分が所属する集団、考えていることなど）と関連付けてまとめる。

⑥ 批評・評価

- ◆ テキストはどのような視点からかかれているか、どのような視点が欠如しているか、新しい視野・知識をもたらしたか等をまとめる。

⑦ リハーサル

- ◆ ディスカッション時の質問を準備し、発言内容をまとめ、口頭で伝える練習をする。

出典：異文化コミュニケーション学部「基礎演習 2」配布資料

2)協同学習のすすめ方

「協同学習」のすすめ方

<予習>

前期配布のプリント「予習の仕方」を参照し、事前に必ず十分な予習をすること

<ディスカッション>

ディスカッションは、言葉を使う知的なゲームです。以下のルールにのっとって行います。

- ・ 人の話をしっかり聞く。
- ・ 全員が発言する。(1人ずつ発言する段階では、持ち時間を厳守する。長すぎも短すぎも×)
- ・ 「同じです」は厳禁。人の意見と同じでも、必ず自分の言葉で言い直す。
- ・ 意見に対する批評はO.K. 人格攻撃は禁止。
- ・ 発言のとき予習ノートを読みあげない。
- ・ ディスカッション中は、「話す／聞く」ことに集中する。
- ・ ノートは、「予習」の部分と「授業メモ」「復習」の部分と、あとから見ても分かるように区別して記入すること。(ただし、ディスカッション中は、キーワードなどをメモするにとどめて、なるべく書かないこと！)

<ディスカッションのすすめ方>

- ・ 「係」を決める
 - ・ 司会：ディスカッション手順に従って進行する。
 - ・ 時計係：各段階の時間を測り、「時間厳守」で進行するよう、みなに合図をする。
「1人ずつ発言」のときは、1人の持ち時間を決めて始める。
沈黙でも持ち時間は減らさない。話が終わらなくても切る。
 - ・ 記録係：ディスカッション後、(メンバーと相談しながら)「記録用紙(発表準備シート)」を記入する。(ディスカッション中の「書記」ではないので注意！)
 - ・ 発表係：「記録用紙」をもとに、(次週)グループを代表して、ディスカッション全体の報告をする。

段階	時間配分	内容	
	60分		
1	2分	準備	ウォーミングアップ。全員と握手と挨拶。 係決め→ディスカッション開始
2	10分	語彙・概念の理解	予習② 分からなかった言葉、概念を出し合い確認
3	10分	主張の理解	予習③ 1人ずつ発言→みんなでディスカッション
4	30分	知識の統合・適用	予習④ 1人ずつ発言→みんなでディスカッション
5	5分	テキストの評価	予習⑤ 1人ずつ発言→みんなでディスカッション
6	3分	ディスカッションの評価	ディスカッションはうまくいったか。改善点は？ グループのまとめ

☆このプリントは、毎回持参すること。

出典：異文化コミュニケーション学部「基礎演習2」配布資料

3) フィードバック用紙

フィードバック用紙

年 月 日 作成

学生番号： _____

氏名： _____

I 以下の①～⑩の各項目について、下記の 5 段階のどの評価であると思いますか。あなたの評価を () の中に 1～5 で記入して下さい。

- 1: 全くそう思わない
- 2: あまりそう思わない
- 3: どちらともいえない
- 4: そう思う
- 5: 大いにそう思う

- () ①私は予習が十分にできていた。
- () ②人の話を聞く時、言葉をしっかり聞き取った。
- () ③人の話を聞く時、視線などの表情、身体動作などからも情報を得た。
- () ④自分が話す時、声の大きさに気がつけた。
- () ⑤自分が話す時、視線などの表情、身体動作に気がつけた。
- () ⑥ディスカッションでは、グループ全員の意見を把握できた。
- () ⑦ディスカッションでは、自分の意見をグループ全員に理解してもらえた。
- () ⑧ディスカッションでは、人の意見に的確な質問ができた。
- () ⑨グループ全体として、活発にディスカッションができた。
- () ⑩私は今回の役割 () 係) をきちんと果たした。

II 参加者は集団にどれほど貢献できたと思いますか。自分を含めメンバー全員の氏名を書き、貢献度を次の尺度に従って評価し、() の中に書いて下さい。

大変小さい 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 大変大きい

自分： _____ () 仲間： _____ ()

仲間： _____ () 仲間： _____ ()

仲間： _____ () 仲間： _____ ()

III 意見・感想

出典：異文化コミュニケーション学部「基礎演習 2」配布資料

5. 協同学習における学びと可能性

—学生ディスカッションを見学して—

御手洗 明佳（大学教育開発・支援センター 学術調査員）

1) 協同学習の特徴

異文化コミュニケーション学部「基礎演習 2」で取り入れられている「協同学習」において、学生たちはどのようなディスカッションをおこなっているのだろうか。もともと、協同学習とは「学生たちが主体的に問いを発見し、それに取り組むための力を養うプロセス」として採用される授業方法の一形態だと言われている。特徴として、教員が学生に関与しないという点が挙げられる。それは、当然のことながら、教授（ティーチング）をしていないということではない。教員は予め学生に対し「予習の仕方」や「ディスカッションのすすめ方」について、明確な枠組みを説明し、いざ、各グループにてディスカッションが開始されてからは、学生たち自身のマネジメントに議論の深まりをゆだねているといえる。つまり、この授業における教員の役割は、学生の主体性を導き、広がりを持たせるための「場」を作り出すことであるといえよう。他方、学生は、教員によって作り出された「場」において、どのように知識を理解し、論理的思考やコミュニケーションの力を培うきっかけを得ているのだろうか。本節では、授業見学の中で観察された学生らの反応や発言に注目し、協同学習について理解を深めることとする。

2) 教員による「場」の設定

今回の授業見学で使用されたテキストは、山本雅代編『日本のバイリンガル教育』（明石書店、2000年）の第一章に掲載されている末藤美津子著「日本の学校におけるバイリンガル教育の展開」であった。テキストの内容は、日本の学校が、日本語以外の言語と深い関わりをもつ子どもたちの言語と教育の在り方をどのように考えてきたか、その歴史的展開をたどるものである。

このテキストについて「予習の仕方」に従い予習をしてきている学生らは、4～5名ずつのグループに分かれ、「ディスカッションのすすめ方」に従い60分間の議論をおこなう。その後、各グループにおける話し合いのなかで、興味関心、疑問を抱いたテーマを選定し、次回以降に行われるグループ発表に向けて更なる学習をおこなうという流れとなっている。

教員によって設定されている「ディスカッションのすすめ方」は、①準備（握手と挨拶）、②語彙・概念の理解、③主張の理解、④知識の統合・適用、⑤テキストの評価、⑥ディスカッションの評価、という流れである。

これらの、課題テキスト、十分な予習の指示、ディスカッションの具体的手順等を設定することによって、学生が主体的にディスカッションし、学ぶための「場」が成立していた。

3) 知識の統合・適用

「すすめ方」に沿ったディスカッションを聴いた中で、学生の個性や価値観が最も鮮明に表現された場合は、「④知識の統合・適用」の箇所であった。教員が設定した「場」で、学生らは如何なる議論を展開させていたか、筆者が授業見学中に取ったメモを手掛かりに分析していくこととする。

「予習の仕方」によれば、「知識の統合」とは、「著者の主張や話題（A）と、他の関連する情報や調べて得られた情報（B）を結びつける」、また「AとBの両者を比較検討し、類似点や相違点をまとめる」作業であると位置付けられている。これを授業見学时に用いられたテキスト^[1]と照らし合わせると、テキスト中の子どもたちが受けてきたバイリンガル教育を話題（A）とし、学生はそれぞれの経験（B）と結び付けながら、テキストとの類似点や相違点を挙げた。以下では、あるグループのAさん、Bさん、Cさん、Dさんが「知識の統合・適用」をいかに進めたかについて取り上げる。

Aさんのケース：

【幼少期を海外で送った経験とテキストの比較】

私は帰国子女で海外経験がある（幼稚園～小学5年、A国）。私の経験からは、現地校、英語の塾、家庭では日本語を学んだが、選択できる機会があって恵まれていた。本文の例を読むと、ネガティブな部分ばかり強調されているが、そればかりではないと思う。ただ、帰国後の補助は大切だと思う。

Bさんのケース：

【身近な外国人と関わった経験とテキストの比較】

高校の先生が国際結婚だったが、赤ちゃんが親によって言葉を使い分けてい

て驚いた。また、本文には「外国人は日本にくと『日本語をしゃべろう』という圧力を受けている」とあるが、私の知り合いの外国人大学院生は全くそのようなプレッシャーは受けてないと話していた。

Cさんのケース：

【中学生時代に友人が海外へ引越した経験とテキストの比較】

中学のとき、急に友人がアメリカに引越しをした。とても急で大変そうだったし、行ってからも日本人学校と現地校の毎日は実際大変だったというが、日本に帰ってきたら、英語がペラペラになっていた。海外だと、英語をしゃべらなくてはならないというプレッシャーを日常生活を通じて受けるが、「日本」という風土はそのようなものをもっていないのかもしれない。日本人は、外国人に日本語をすすめるようとはしない。フランス、特にパリでは、自国の言葉に誇りをもっていて、英語がわかってもしゃべらない人がいたそうだ。

Dさんのケース：

【著者の意見と自分の意見の比較】

自分はずっと日本（生まれ日本育ち）だけどバイリンガルになりたかった。けれどそのような中で、世の中の一一般論では「まず、日本語を！」、「まず日本文化を！」ということを言われて、わかるけど、いまいち納得していなかった。しかし、このテキストを読んで、まず自分に基盤がないと困ることが理解できた。自分も中学校で英語を学び始めたときは、よくわからなかったが、大学生になり基盤ができて今はスペイン語でも結構すんなり頭に入ってくる。

^[1]使用テキストは「多様な言語背景をもつ子どもたちに対する言語教育」と題され、「1. アイヌの子どもたち」、「2. 在日朝鮮人の子どもたち」、「3. 帰国生の子どもたち」、「4. 中国から引き揚げの子どもたち」、「5. インドシナ難民の子どもたち」、「6. 外国人労働者の子どもたち」という構成であり、彼／彼女らを対象としたそれぞれのバイリンガル教育について、歴史的背景を根拠に説明されている。

Aさんのケースでは、【幼少期を海外で送った経験】とテキストの「知識の統合・適用」が行われている。自分が当たり前だと思っていた経験を、テキストで語られた帰国子女の状況と比較したことにより、自分が経験した環境や待遇が良かったと判断し、これまで無意識であった帰国子女に対する言語政策や制度について注目し始めている。またBさんのケース（【身近な外国人と関わった経験】）においては、テキストの具体例以上に個人の育った環境（ここでは、異なる言語を話す両親をもった乳児）や、「日本語をしゃべれ」という日本の文化的圧力を感じない個人の性格や価値観が存在していることが指摘され、決まった枠組みに当てはめることに懐疑的な意見が挙げられていた。さらにCさんの【中学生時代に友人が海外へ引越した経験】では、身近な存在だった友人の海外での成長から、個人の能力や性質という問題だけではなく、日本という文化的環境の特異性に注目してバイリンガル教育について考えようと試みている。最後に、Dさんのケース（【著者の意見と自分の意見の比較】）では、自分のバイリンガル教育に対する考え方と著者の考え方の違いに対し、様々な例（テキストでは6事例）を理解することによって、自分の中で気づきが生まれたことを説明している。



4) まとめ

以上のように、授業見学で観察された学生らの「知識の統合・適用」は、テキスト中の著者の主張と実際に自分が見聞きした経験や価値観との比較であったといえる。比較し、類似点や相違点を自らで思考した結果、著者の意見、自分の意見、友人らの意見だけが絶対的意見とはいえないという気づきを得ている。また、同時にそれぞれの頭の中で問題を考える観点が増えていることも確認された。ものごとを考える観点が増えるということは、主体的に問いを発見し、論理的思考力を身につける前提となる手段であり、それを養うことは、協同学習の目的の一つであるといえよう。

つまり、「協同学習」では、教員が設定した「場」において、学生らは主体的に考え、発言することによって、ものの見方を広げる、というトレーニングを繰り返しおこなうことができていた。これは、21名の学生がいる教室内での実践として、学生が主体性をもって学べる効率的かつ優れた場の設計だと考える。

ただし、観点の増やし方が、学生自身の経験や価値観に限られていた点には注意が必要ではないだろうか。ディスカッション前半部分（②語彙・概念の理解と③主張の理解）に関連させて調べた本や情報、知識を使用して「知識の統合・適用」ができるようになれば、授業における学びに幅と深さが加わることが予想される。それは、「協同学習」という教育手法の、すでに積み重ねられているとうかがった継続的な省察によって、可能になるに違いない。学生の主体的な学びの手段として、「協同学習」の今後の発展に期待したい。

16. 意見交換会

1) ワークショップ当日の意見交換会

○司会 これから意見交換の時間とさせていただきたいと思います。高先生と、この「基礎演習 2」を統括なさっている、異文化コミュニケーション学部教授の山田久美子先生にもご同席いただけます。どうぞよろしく申し上げます。

両先生は次の時間に授業がありまして、ちょっと授業を遅らせていただいて、3時5分まで時間をいただいております。短い時間ですけれども、ご意見・ご質問を自由にいただきたいと思います。

質問1 異文化コミュニケーション学部における基礎演習の位置づけ

○松浦 法学部の松浦と申します。まず確認で、この授業が学部教育の中で、どういう位置づけになっているのかということ。それから、それとも関わるのですが、モデル的なものがある、こういうディスカッションの授業を設けましょうというような形でやっておられるのか、ちょっとそのあたりを聞かせていただけますか。

○山田 本日は大勢の方にご参加いただきまして、ありがとうございます。学生のディスカッション中心の授業ですので、果たしてどこまで私どもの教育の実態をお伝えできたかということはあるんですけども、高先生にいろいろご準備いただいて、ご覧いただきました。

異文化コミュニケーション学部ができましたときに、初年次教育ということで、まず大学で勉強するとはどういうことかというのを、専任が中心になって教えようということになりました。ですから必修の科目として、全1年生が水曜日の3時限に、6クラスに分かれて、専任が4人に助教の方が2人で、前期・後期担当しております。

お配りいただいた前期の進行表にもあったと思いますけれども、基本的に、大学での学習というものについていろいろな側面から教える授業なわけでございます。その中心となるのが Learning Through Discussion、「ディスカッションを通じて学ぶ」というものです。学生が、あるテキストなり講演なりについて、ノートを使って予習した上で、グループ討論を通じて主体的に問題を発見して、それについて調べてきて、それを口頭発表し、さらには口頭発表をもとにレポートを

書く。そのミニレポートを2回、あるいは3回書いて、最終的に大きな発表をし、そして大きなレポートを書いて終わるといふ、そういう中身でございます。それはやはり、学部設立のときからの理念に沿ったものになっていると思います。この5年で少しずつ変化はしておりますけれども、基本的には、同じやり方でずっと進めております。

質問2 ディスカッションへの介入

○**関根** 経済学部の助教の関根です。今日はありがとうございます。私も1年生の基礎ゼミナルを経済学部で担当しているのですが、20人から25人ぐらいの1クラスで、円卓になって班ごとに発言をしてもらうような形で進めています。今日の見学では、少人数のグループにすることのメリットをとて感じました。やっぱり一人一人の発言の時間が長いですし、緊張せずにかかなり自由に発言していると感じました。感想として、かなり議論の中味がしっかりしていて、深い議論ができていますので、予習をしているということと、同じテキストを3週にわたって理解を深めていく、問題を立てていくということは大変よいことだなと思いました。

質問なんですけれども、学生だけで議論をしていると、どうしても、たまに議



論がとんでもない方向に行ってしまったりとか、あるいは間違っている議論をしているのに、誰も気づかずに止める人がいないので、そのまま進んでしまうということがあると思います。私自身が基礎ゼミナールで遭遇するのですが、今日、先生が巡回されていて、ディスカッションの間は、特に「これちょっと違うんじゃない」というようなことはおっしゃっていません。議論の方向が外れてしまったようなときのアドバイスとか、方向修正などはやっていませんでしょうか。

○高 原則として、ディスカッションの間はどんな議論をしていても、教師は全く介入しないことになっています。やはり先生がご指摘されたように、何かもうとんちんかんなほうに行ってしまったなという、そういうことを感じることはあります。今日はあまり時間がなかったので、そういうことを言えなかったのですが、先学期から、やはり教師からのテキスト指南ということをやっています。ディスカッションで、学生が目を向けることが重要なのに、とらえ切れていなかったという点を、最後の、本当に2～3分ではありますけれども、「こういうところももうちょっと話し合ったほうがよかったんじゃないか」という形で教師から指摘します。

あとは、やはりグループ発表がありますので、そのグループ発表に対してのコメントとして教師からフィードバックしたり、ミニレポートに対してフィードバックしたりという形で指摘するようにしています。

○関根 ありがとうございます。

質問3 授業の枠組みをどうつくり、どう共有しているのか

○豊田 観光学部の豊田です。同じようなことを自分の演習でやっていて、あまり構造化されていないやり方でやっているんですけども、今日は非常に構造化されている、体系化されているやり方を見て参考になりました。

全体のシステムづくりと個別の教員の関わり方について質問です。全体のシステムを作成して、そのやり方を個別の教員に対して伝える作業が必要だと思うんですけども、その辺、どうやられているのかをお聞きできますか。あるいはシステムづくり自体から当事者が関わってということにもなるのでしょうか。

○山田 そうですね。毎学期、始まる前に、テキストの選定ということで2回ほど集まって選定をし、その次に大体の進行案を、担当者間で決めております。そ

れから、2年にわたって担当する専任教員が、私がそうなんですけれども、去年と今年と担当することによって、ノウハウを継承しております、私が月曜日あたりに、何に何分という時間配分ですね、それを先生方にメールでお伝えしております。もちろんそれぞれの先生で、やり方は多少違ってくるところはあると思いますが、基本的には、こういう配分があるとすると、それに従うほうが先生方もやりやすいようで、一応そういうふうに統一してやっております。大学の授業だというのに、ここまで何分、何分とやるのかと、最初は私も思いましたけれども、やはり構造化することによって、今、学生に何を教えているかということを、教員のほうも認識できるので、それなりに効果があるように思います。

○**豊田** 若い先生だと、多分こういうのに慣れていないんじゃないかなと思うんですけど、割と年配の人だと、こういうのに慣れていない人が結構多いんじゃないかなと思うんですけども、やっぱり担当者は若い方をお願いしているんでしょうか。

○**山田** ご覧のとおり、私は年配のほうの部類でございますけれども、声がかかりましたが、大変です。そもそもテキストを選定するときに、10冊ぐらい読んで、是非を議論したりいたしますので。あとはやり方自体は、比較的すんなり取り入れることもできると思いますか、言われたとおりにするということなので、基本的には。去年は、こんなに何もコメントしないで見ていただけでいいのかしらと思いましたが、やはりそうすることによって学生自身が気づきます。とかく教員というのは、いろいろ教えたくなっちゃうんですね。だって自分のほうがたくさん知っているのは当たり前なんです。でも、それをいっても、学生はほとんど聞いていないんです。学生たちが議論した中から、ちょっと拾い上げてあげて、というふうにしないと、それから先、学習意欲というものが育たないように思いました。

ですから、ああいうふうに取り足取り不足のはいかなものかと最初、私も思いましたが、それなりの効果は上がりますし、あとやはり、学生は1年生ですので、高校を出たばかりなんです。私たちは、もうちょっといろいろ知っているんじゃないかなと思うのですが、実は知らないんですよ。ですから、そこから始めるということで、こういう構造化された授業をしております。いろいろ問題点はあるんですけども、ああいうふうにグループでディスカッションすることによって、勉強する学生としない学生がいたりしますが、いつも同じ学

生だけが勉強してくるというのでは、やっていけないという状況を体験するとうんですかね。

それともう一つ、ご承知かと思いますが、本学部では、2年生の後期は全員、海外留学をいたしますので、多少学生のほうにもそういう差し迫った緊張感はあるかもしれません。

質問4 テクストの選定と、フィードバック用紙の活用について

○孫 今日はありがとうございます。法学部の孫と申します。短く2点お聞きしたいと思います。私もグループ・ディスカッションを取り入れておりますが、こういった流れ、進め方というものを決めることによって、学生がそれを意識しながら、全員バランスよく参加している点が非常に印象的でした。

1点目は、テキスト選定についてです。テキストを選ぶにあたっては、論争になり得るようなテーマを決めて、それでみんなの賛否が分かれるような、議論になるようなものを選ぶ選び方と、知識やある情報がそこに含まれていて、それを題材にしてみんなで議論してもらえようものを選ぶ選び方の2つがあるかと思います。今回の文献はどちらかという、後者のほうなのかなという印象を受けました。私のグループでは、いろいろな歴史的経緯について、自分なりの経



験に照らしてそれを説明するという内容が多かったです。テキストの選定をする上で、どういう選択基準をお考えだったのかという話をお聞きしたいと思います。

2つ目は、フィードバック用紙に参加度、貢献度というのがありました。先ほども、自分を低くしないようにと、差をつけるようにという先生からご指導がありました。フィードバック用紙にこれを入れることになった経緯をお聞かせ下さい。また、これを入れることによって、学生全体の参加度、貢献度にどの程度の効果があるかとらえていらっしゃいますか。

○高 まず后者の質問のほうからいきますと、学生がこれに記入することを通じて、ディスカッションを振り返るという点では、とてもいいと思います。あと、これがあるからディスカッションに参加するということが、特にあるというふうには私は思っていないのですけれども、でも学生の評価は総じて納得のいく結果が出ています。私がじっくりと、一つ一つのグループの、一人一人の貢献をチェックしていけるわけではないのですけれども、そのグループがディスカッションしている間に見にいって、予習の度合いなんかも見ながら自分で感じたことと、そのグループのメンバーが出した評価というのは、合致していることが多いと思っています。自分で自分を評価して、またグループのメンバーを評価することによって、反省をするいい機会だと思いますので、次回の協同学習の励みというか、そういうものにもなるのではないかとと思っています。

前者に関しては、どうでしょうか、テキストの選定に当たっては、本当に何度も先生と集まって議論をするんですけども、異文化コミュニケーションという学部の中で4年間教育を受けていく上で、最低限、今後考えていかなければいけないということと、あとは賛成か反対かと大きく分かれてしまうものというよりは、これをきっかけにして、どういうふうに違うものにアプライして、議論を発展させていく可能性があるかというようなことも基準になっているのではないかと思います。

○山田 これは何年も使っているテキストですね。

○高 去年も使っています。

○山田 基本的に後期は、論文を1点と本を1冊読むんですけども、担当教員も毎年変わりますので、全員が幾つか推薦した中から選ぶということなんですが、この後に読む、伊豫谷さんの『グローバリゼーションとはなにか』〔注：伊豫谷

登土翁、2002、『グローバリゼーションとは何か―液状化する世界を読み解く』、平凡社。] という本は、それを読むことによって、グローバリゼーションそのものの是非について、学生が考えるようなもっていき方をする教材にはなっております。ですから両方の面があると思います。ディスカッションにどういうふうに関わるかということですが、問題発見ということと、それからその是非を議論する論理性を養成するということと、両方あると思います。

○**司会** ありがとうございました。お時間になってしまいました。きょうは見学と意見交換会、本当にありがとうございました。この場でお聞きできなかったご質問については、お帰りの際に書面にてお出しください。改めて高先生、山田先生にご回答をいただきます。

最後にもう一度御礼を申し上げて終わりたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

2) 書面による質疑応答

※高先生、山田先生が次の授業を控えていたため、授業見学直後の意見交換会の時間は限られていた。その場ですし切れなかった質問・コメントを参加者から書面で回収し、後日、両先生よりご回答いただいた。

質問5 バイリンガル教育に関する文献を取り上げた理由

○質問者 後期最初の文献のテーマとして「バイリンガル教育」を取り上げていますが、どのような意図がこめられていますか？

○高 基礎演習の協同学習で扱われる文献はすべて、担当教員が話し合いを重ねて選んだものです。本学部の基本方針、「多文化共生の問題に必要な偏見のない視点を養い、冷静に問題を捉える力を育てる」にのっとり、前期・後期通して、多文化共生・異文化理解について様々な視点から考える文献を選んでいきます。また、前期には、新聞記事からはじめ、徐々に難易度をあげてゆき、学期末には学術論文を理解しそれをもとに議論する、ということを行いました。後期第1回の教材として「バイリンガル教育」を取り上げたのは、1) 前期と夏の課題図書(日本国内の多文化共生問題) で扱ったテーマをもう一度言語・教育という視点から振り返る、2) 第2回の教材に指定している新書『グローバリゼーションとは何か―液状化する世界を読み解く』を通して異文化理解・多文化共生・折衝の問題を「グローバル」「ナショナル」という視点から考えることにつながる、という2つの理由からです。

質問6 グループの分け方

○質問者 グループの分け方は、先生が決めていますか？またグループをシャッフルして変えることはありますか？

○高 私のクラスでは、学生たちに自由にグループを作らせています。教師がグループを割り当てるクラスもあります。どちらの場合も、協同学習ごとにグループをシャッフルし、学生は毎回異なるグループで協同学習を行います。

質問7 アイスブレイク

○質問者 学生が発言しやすくなるように、「アイスブレイク」的なことはされていますか？

○高 前期の最初の数回は、グループワークを始める前に、グループメンバーの名前を覚えるゲーム的な自己紹介を1、2分程度行いました。

質問8 教員はディスカッションに一貫して介入しない

○質問者 入学直後の学生は、人間関係もできていないですし、ディスカッションにも慣れていないと思います。その最初の壁を乗り越える教育上の工夫は何かありますか。またディスカッションに教員が介入しないという原則は前期から一貫しているのでしょうか。それとも最初は何らかの介入を行い、徐々にそれをなくしていく、という方法を取られているのでしょうか。

○高 教員がディスカッションに介入しないという原則は前期の最初の授業から一貫しています。学生たちには、議論が滞っても教師は議論を助けたり介入することはないので自分たちで打開するように、というインストラクションを与えています。「教師が介入しないこと」が学生同士のディスカッションを活性化させる上で大いに役に立っていると感じます。また異文化コミュニケーション学部では、入学オリエンテーションのウェルカムアワーでも、「基礎演習0回」という位置づけで教師が介入しないグループディスカッション・発表を取り入れ、高校や予備校とは異なり、大学（特に基礎演習の授業）では先生に「教わる」のではなく自分たちで学ぶ、考えるのだ、ということを強調しています。

質問9 予習とディスカッション参加度に対するサンクション

○質問者 学生の参加はどう担保するのでしょうか。サンクションはありますか？またどうしても積極的に取り組めない学生や、途中から挫折してしまうようなケースはありますか。そのような場合はどのように対処なさっていますか。

○高 予習の重要性を強調し、前期には予習ノートを成績評価の30%にしていることからほとんどの学生がそれなりの予習をできています。このことが議論の参加を担保するうえで役にたっています。また、時計係、司会係に全員の発言を確保するという責任を与えているため、議論に全く参加しないという学生はありません。ただ、十分に予習をしてこない学生もいます。予習ノートを持参していなかったり、何も書かれていないような場合には注意を与えます。また、そういった学生の姿勢は、学生の相互評価やミニレポートの出来に反映されますのでその評価がある意味サンクションになっています。

質問10 レジюме作成の指導

○質問者 予習ノートの作成のし方を指示なさっていますが、レジюме作成について学生が学ぶ機会がありますか？

○高 本基礎演習では、予習ノートの作成と基本的なアカデミックレポートの書き方については指導していますが、レジюмеの作成は取り入れていません。

質問11 専門ゼミとの接続

○質問者 専門ゼミとの連続性については、この授業科目を通じて何か取り組みをされているでしょうか。

○山田 特にしていません。ただし基礎演習により、大学での学習の基礎的な力を身につけて、2年次の海外留学に臨み、さらに3年次以降の専門演習でテキストを読み、討論して、レポート書くというのが本学部の目指すところです。

質問12 成績評価

○質問者 学生の評価はどのようにされているのでしょうか。グループ・ディスカッションを中心とした授業では評価が難しいと思います。学生の相互評価の結果も反映されるのでしょうか。

○高 配布資料に記されているように前期は授業への参加度＋レポート（40%）、協同学習フィードバック（30%）、予習ノート（30%）、後期は授業への参加度（発表を含む）＋出席（30%）、ミニ・レポート（10%）課題図書レポート（夏の宿題）（10%）、協同学習フィードバック（20%）、最終レポート（30%）という配分で成績評価をしています。学生同士の相互評価は、協同学習フィードバックの評価に反映されます。

質問13 共通の教材・手順による授業運営

○質問者 学生から、どの教員が担任になったかについてクレームはありますか？ある学部では、必修の基礎演習などでかなり文句が出て困っているようです。

○高 ないと思います。各クラス同じ教材・手順で授業がすすめられますので、誰が担任になっても学生たちは同じレベル・質の授業を受けられるようになっています。

その他のコメント1

○見学者 ディスカッションの工程表（○○が△分）が守られていないように思いました。

○高 私自身もその点に気がつきました。次回の協同学習を始める際に工程表の時間を守ることを改めて強調しようと思います。

その他のコメント2

○見学者 ディスカッションをすること自体が大事だということは理解しましたが、テキストがきちんと読めておらず、薄くまた異なることについて意見交換がされていることがとても気になりました。学部性格もあると思いますが、教育とは何なのかいろいろと考えさせられました。テキストの選定は、良いものが選ばれていると思います。ご苦心はよくわかりました。

○高 テキストがきちんと読めていない、議論のポイントがずれているという指摘は、基礎演習担当教員のミーティングでも課題として取り上げられてきました。この問題への取り組みとして、今年度から教員による「テキスト指南」を協同学習1回目後に5分程度加え、文献の重要ポイント、議論・考察の発展のさせ方を教師がアドバイスするようにしています。テキストの読み方は、「予習の仕方」でかなり綿密に指示をしており、それによって「ただ漠然と読む」というのではなく、「重要ポイントを押さえ深く考えながら読む」ことを学生たちは学びつつあると思います。「テキストを批判的に読み、深く議論する」ということは一朝一夕に、また基礎演習の授業の中だけで身につけられるスキルではありませんが、本授業の中で繰り返しその重要性を強調していくことが必須であることをコメントを拝読し再確認いたしました。

参加者の声 1

孫 斉庸 (法学部准教授)

今回、私は、高みか先生(異文化コミュニケーション学部)の「基礎演習 2」を見学させていただいた。当日の授業では、事前に配布された「日本のバイリンガル教育」に関するテキストを予習してきた学生たちが、グループごとにディスカッションを通じて「協同学習」を実践した後、次回にクラス全体でその成果を共有するための準備作業に取り組む様子を見学した。

割り当てられたグループによって見学者の印象が異なるかもしれないが、今回私が見学することになったグループの学生たちは、これまでの授業で学んできた協同学習のプロセスに随分慣れている様子で、全員で活発に議論を交わしていたのが印象的だった。具体的なすすめ方としては、最初に、司会、時間管理、記録、発表などの「係」を決めた後、事前にテキストについて予習した内容をまとめたノートを参考にしつつ、言葉・概念の理解→主張の理解→知識の応用→評価という流れで議論を行っていた。

ほとんどの時間が学生同士のディスカッションに割かれていたこともあり、今回のワークショップは、どちらかと言えば教員による実際の「教授法」に触れるというよりも、基礎演習プログラムの全体的な流れのなかで今回の授業がどこに位置づけられるのかを意識しつつ、実際に学生同士の議論でどの程度教育効果を挙げているのか観察するところに重点が置かれていたと言えよう。その点から、事前に大学教育開発・支援センターを通じて、基礎演習 1 及び 2 のシラバスと関連資料を入手し、目を通すことができたので授業の全体像を理解する上で非常に役に立った。

授業を見学して特に印象的だった点としては、(1) 参加者全員が何らかの形で均等にディスカッションに参加するように色々工夫されていたこと、(2) 授業の最後に学生たちに「フィードバック用紙」を書いてもらうことによって、授業で指導してきたポイントに関して、定期的に自己点検・評価を行うことができるようにしていることなどが挙げられる。議論の途中で決められたすすめ方や時間配分を意識するあまり、折角とどりついた面白い論点に関する議論を中途半端

で打ち切ったりする場面もあったが、それもすべて協同学習のプロセスを学んでいく段階では仕方ないものであるかもしれない。

以前経験したグループディスカッションを採用した他の授業では、小グループに分けることによって参加者一人一人の発言機会を増やすことには成功したものの、グループで議論された論点をクラス全体で共有するプロセスがうまく機能せず、如何にそれに対応したらいいのか悩まされたことがある。しかし、今回のワークショップを通じて、議論や発表のすすめ方に関する工夫次第では、そのような問題点にある程度対応できるということが分かった気がする。

最後にこのような授業見学の機会をお許しくださった高先生と、多くの見学者がそばに座って見守るなかでも緊張せず真摯に授業に臨んでくれた学生の皆さんに感謝を申し上げたい。

参加者の声 2

西原 廉太 (大学教育開発・支援センター センター長、副総長、文学部教授)

大学教育開発・支援センター主催の2013年度第1回FDワークショップに参加した。今回は、異文化コミュニケーション学部助教の高みか先生の授業「基礎演習2」を見学させていただいた。同授業は、「協同学習」という方法論に基づき、グループワークを通じて、学生の問題発見力、論理的思考力、コミュニケーション力を身につけさせようとするものである。協同学習とは、与えられたテキストを、十分な予習のもとに、授業時のグループ作業を通して理解・発展させる手法で、毎回、①準備（ウォーミングアップ）、②語彙・概念の理解、③主張の理解、④知識の統合・適用、⑤テキストの評価、⑥ディスカッションの評価、という一連のプロセスで構成される。各4～5名からなるグループ毎に、全員が、進行役、タイムキーパー、記録、発表等の役割を担い、各自が予習してきた内容を中心に発言し、それを基にディスカッションが展開される。

実際の授業においては、すでに前期の「基礎演習1」で基本的なスキル等を訓練されているせいか、どのグループもある意味手慣れた形で、グループ作業が進行されていた。非常に良く練り上げられたシステムの中で、学生個人々人による事前準備と、授業時の共同作業がうまく組み合わされていることに感銘を受けた。このグループ作業中は、教員はほとんど介入することなく、学生たち自身の運営に委ねられていた。教員というものは、兎角一方的に話し続け、何かと講釈を垂れるものである。学生たちの動きに耳を澄ましながら、しかし、適確な指導を行うことほど、大学教員にとってハードルの高いものはないと言っても過言ではない。また、すべての教員がそのような指導ができるとは限らない。この異文化コミュニケーション学部の「基礎演習」が、授業運営、仕組み等のルール、フォーマットを明確にすることにより、どの教員が担当したとしても、同質のクオリティでの展開が可能となっている点は、大いに注目、参考に値しよう。

授業見学後の意見交換会で、「基礎演習」統括責任者である山田久美子先生は、異文化コミュニケーション学部の初年次教育を設計する際に、まずは大学で学ぶこととは何かを専任が中心となって教えること、その中心として、Learning

Through Discussion を据えようとしたことを説明くださった。本学は、2016年度から新たな学士課程カリキュラムを展開する予定であるが、その核心は、「立教ファーストターム・プログラム」（仮称）という徹底した初年次、導入期プログラムの全学的設定にある。異文化コミュニケーション学部の「基礎演習」は、この「立教ファーストターム・プログラム」を構想する上で、貴重なテンプレートとなるはずである。

「教育」とは言うまでもなく英語では“education”と言う。これはラテン語源の、“ex”と“ducare”の合成語である。“ex”は「外に」、「ducare」は「引き出す」「開く」という意である。つまり、本来、“education”というのは、学生たちの無限の可能性を「外に引き出す、開く」ということであって、何かを上から教え込むということではない。その意味では、教員は、学生たちのタラント、賜物を引き出す有能な「ファシリテーター」でなければならないのである。今回、見学させていただいた「基礎演習 2」において、高みか先生は、まさにそのような「ファシリテーター」であった。

最後に、貴重な時間と機会をいただいた、異文化コミュニケーション学部、高みか先生、山田久美子先生、また受講生の皆さんに、心よりの感謝を申し上げたい。

第2部

英文教材を用いた経済学的思考の訓練 —経済学部「基礎ゼミナール 2」の取組み—

1. 第2回 FD ワークショップ(授業見学)概要

1) 授業見学

<授業科目> 基礎ゼミナール2 (経済学部学部)

<授業担当> 関根佳恵先生 (経済学部 助教)

<開催日時> 2013年11月19日(火) 15:00～16:30 (4限)

<出席学生数> 19人

<見学者数> 21人

<見学方法> 下の写真のように、学生は「コ」の字型に着席し、見学者は教室後方に着席して見学した。



2) 意見交換会

<開催日時> 2013年11月19日(火) 16:40～17:30

意見交換会の内容は「5. 意見交換会」(p.54～)を参照されたい。



2. 経済学部における初年次演習科目 (基礎ゼミナール 1・2)概要

1) 目標と授業内容等

同学部の初年次演習科目における目標等を以下に示す。今回見学した基礎ゼミナール 2 だけでなく、前期開講の基礎ゼミナール 1 についても合わせて掲載する。

◆基礎ゼミナール 1

前期 / 2 単位 / 自動登録 (全員履修)
◇授業の目標 大学における学習に円滑に適応できるように、主体的・能動的な学習の態度と方法を身につける
◇授業の内容 大学の学習は、学生が主体的・能動的に取り組むことで成り立つ。自ら考え、疑問を持ち、課題を設定し、その課題を追究することが学生に求められる態度である。本科目は、その態度を習得できるように援助することを目的とする。 少人数のゼミナール形式で、具体的な課題を設定し、実践的に学んでいく。文献・論文の読み方、必要な情報を収集・整理する方法、調査の方法、レジュメ及びレポートのまとめ方、プレゼンテーションの仕方、ディスカッション（質疑応答、意見表明）の方法について、実際に課題に取り組みながら習得していく。個人研究とグループ研究を組み合わせる。仲間との協力も求められる。本学の施設（図書館、メディアセンター等）も利用する。 1 年次における最重要科目の一つである。全員が必ず履修すること。
◇成績評価方法 出席、参加姿勢、課題レポート等で評価 (100%)

◆基礎ゼミナール 2

後期 / 2 単位 / 自動登録 (全員履修)
◇授業の目標 経済学に関する簡単な英文を読む能力を身につけると共に 2 年次以降の専門ゼミナールでの学習に向けた準備をする
◇授業の内容 経済学に関する英文を読むことを通じて、経済英語の基礎的概念を習得し、また経済学的な思考方法をトレーニングする。 少人数のゼミナール形式で、英文の読解を行う。経済学部が独自に作成したテキストは、経済学の各分野・時事経済に関する英文を精選している。このテキストにしたがって授業を進める。適宜、担当教員が課題を提示する。予習・復習が不可欠であり、学生諸君の主体的な取り組みが求められる。 また、2 年次から履修できる専門ゼミナールでの学習に必要な基礎能力と学習意欲を高める授業内容も同時に展開する。
◇成績評価方法 出席・参加姿勢 (60%)、映画感想文 (10%)、英語筆記試験 (10%)、期末レポート (20%)

注) 同学部の「講義内容」冊子 (2013 年度) より抜粋して作成。ただし、成績評価方法は関根先生担当クラスのガイダンスで配布された資料に基づく。

2) 授業スケジュール

基礎ゼミナール1ならびに基礎ゼミナール2の関根先生のクラスのスケジュールを以下に示す。網掛けした基礎ゼミナール2の第7回が今回見学した授業である。

◆基礎ゼミナール1（関根先生担当クラス、前期）

			分 担		
			A 班	B 班	C 班
1	4/16	ガイダンス	—	—	—
2	4/23	解説：レポート・レジュメ・プレゼンの方法	—	—	—
3	4/30	輪読：序 章・第1章	<課題文献> 宇沢弘文、2000、『社会的共通資本』、岩波書店。		
4	5/7	//：第2章・第3章			
5	5/14	//：第4章・第5章			
6	5/21	//：第6章・第7章			
7	5/28	レポート中間報告	報告	司会	質疑
8	6/4	//	質疑	報告	司会
9	6/11	//	司会	質疑	報告
10	6/18	ディベート	報告	司会	報告
11	6/25	レポート最終報告	質疑	報告	司会
12	7/2	//	司会	質疑	報告
13	7/9	//	報告	司会	質疑
14	7/16	ディベート	報告	報告	司会

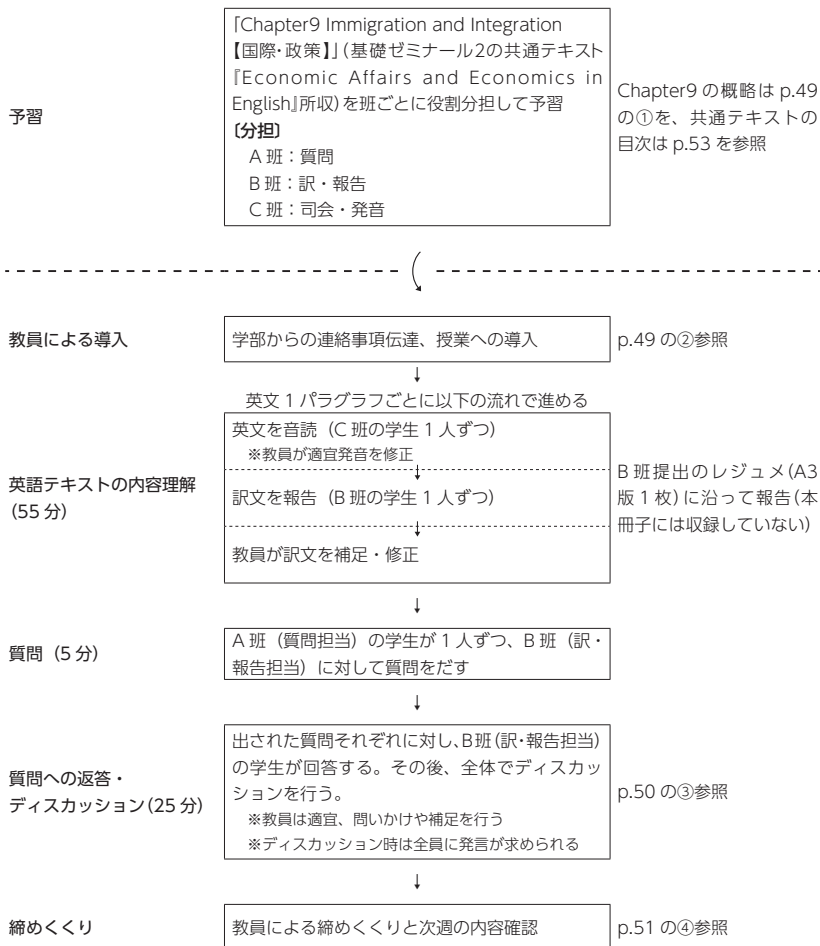
◆基礎ゼミナール2（関根先生担当クラス、後期）

			分 担		
			A 班	B 班	C 班
1	9/24	ガイダンス	—	—	—
2	10/1	輪読：テキストPrep.1	訳・報告	司会・発音	質問
3	10/8	//：// Prep.2	質問	訳・報告	司会・発音
4	10/22	//：// Prep.3	司会・発音	質問	訳・報告
5	10/29	//：// Ch.4	訳・報告	司会・発音	質問
6	11/12	英語映画視聴：ドキュメンタリー映画を視聴。感想文提出	—	—	—
7	11/19	輪読：テキストCh.9	質問	訳・報告	司会・発音
8	11/26	//：// Ch.11	司会・発音	質問	訳・報告
9	12/3	討論：ディベート	報告・討論	司会	報告・討論
10	12/10	輪読：テキストCh.14	質問	訳・報告	司会・発音
11	12/17	英語筆記試験 / 輪読：テキストDT.4	司会・発音	質問	訳・報告
12	1/7	レポート報告	報告	質問	司会
13	1/14	レポート報告	司会	報告	質問
14	1/21	レポート報告	質問	司会	報告

※網掛けはワークショップ当日

13. 見学当日の授業

1) 構成



2) 当日の授業の様子

① 課題英文の概略

「Chapter9 Immigration and Integration 【国際・政策】」は、外交・経済専門の英字誌から抜粋して引用されたものである。内容を要約すると、次の通りである。

2000年代に入り、ドイツでは積極的な移民政策が展開されてきた。その背景として、移民労働者をめぐる社会統合政策の長年の遅れと、人口減少に伴う労働力不足があげられる。さらに、経済発展に資する高度な知識・スキルをもった人材も必要とされている。具体的に実施されてきた政策としては以下のようなものがある。

- ・すでに定住した移民労働者やその家族に市民権を付与する
- ・就労移民のために新しい種類のビザを創設する
- ・1年あたり約1億9千万ドルを投じて3～4か月間の移民向け集中教育プログラム（独語・歴史・文化・法律等）を実施する

これらの施策がとられてはいるが、社会統合にせよ、高度人材の獲得にせよ、その成果はまだ明らかでないという論旨になっている。

抜粋記事であるという制約はあるものの、移民労働者の受け入れと社会統合というイシュー、ならびに、経済成長をけん引する高度な知識・スキル・経験をもつ人材のグローバルな獲得競争という、現代先進国共通の課題について考えさせる内容になっている。

② 導入部での関根先生の発言

○関根 今日教室を変えて、いつもよりだいぶ広いところでのゼミですね。いつものように、まず出席票。名前・所属と、裏面に今週1週間で一番注目した新聞記事の新聞名・日付と記事名を書いて下さいね。

(学部からのアナウンス等が続く)

○関根 それでは、ゼミに入っていきたいと思います。今日はチャプター9、移民政策のところですね。皆さん、レジュメはありますか。今回は訳と報告がB班で、司会・発音がC班になっているんですけども、C班の人で司会をやってくれる人はいますか。できればまだ司会をやったことがない人がいいですね。

はい、**さん? じゃあ、**さんをお願いします。質問は、A班ですね。後ほ

ど質問してもらいます。それでは、司会の**さん、よろしくお願いします。1段落ずつ、まず英文を読んでもらって、その後で段落ごとに訳を確認していきましょう。

○**司会** では1段落目、お願いします。

(1パラグラフごとに、C班の学生が英文を音読し、続けてB班の学生が訳を報告していく。)

③ディスカッションでのやりとり

○**学生A** ちょっと質問よろしいでしょうか。このところですけど、「どの国よりもドイツにおいて社会的階層を上げるということは困難」ということなのですが、これはドイツ人についてのことを意味するのか、それともドイツにきた移民労働者たちがドイツで社会的階層を上げるのが困難ということなのか、どうなんですか。

○**関根** どうですか。誰が答えてもいいですよ。

(発言者なし)

○**関根** チャイムが鳴るまでに誰か答えがでるかな。

○**司会** 答えられる人いませんか。

○**関根** 本文から読み取れることでもいいですし、あるいは今までニュースや新聞記事とかでドイツの社会システムについて読んだこと、聞いたことなど、ありませんか。

○**学生B** 4段落目の最後に、「外国人にとって可能性がある」みたいな言い方をしているので、これは移民のことを言っているのではないかなと思います。

○**関根** 移民がドイツにきた時に社会的階層が上がっていくのが難しい。ドイツ人にとってはそれが難しくないということじゃないかなってことですね。どうですか。

○**学生B** そうです。

○**学生A** ありがとうございます。

○**関根** ええと、実はこれ、移民だけじゃないんですね。本文からだね、今**さん〔学生B〕が読み取ってくれたような読み方をしてしまいがちなんですけど、ドイツ人にとっても社会的階層が上がっていくことがなかなか難しい、そういう国だと言われています。大変エリート主義、高学歴志向であって、社会的上

昇が難しいとされています。だから「ドイツ人にとっても難しい」ということになるかと思えます。

④ 締めくくり

○**関根** 今日は英文の翻訳に時間がかかってしまって議論の時間が短かったですけれども、今日の授業を、これから移民政策について考えるきっかけにしてみてくださいと思います。司会、何か締めの言葉はありますか。司会やってみてどうだった？

○**司会** 難しかったです。

○**関根** 今日はよくトライしてくれました。次回は、チャプター 11 をやりますので、報告と訳を C 班、司会・発音を A 班、質問を B 班、それぞれよろしくお願いします。(中略) あと、A 班の人は今日の質問票を出してください。はい、それでは終わります。

4. 共通テキストの目次紹介

1) 『基礎ゼミナールハンドブック』(立教大学経済学部編)

I 大学での“学び”とは

- 1) 中学・高校での学びと大学での学び
- 2) 問題意識を磨き概念を使いこなす

II 文献・資料をどう検索するか

- 1) 立教大学で利用できるデータベース
- 2) 文献・資料にたどり着こう
- 3) 図書館活用講座を利用しよう
- 4) 必ず役に立つサイト一覧
一君も今日から検索名人一

III 文献・資料をどう分析するか

- 1) 文献・資料をどう読みこなすか
- 2) 調査の方法のイロハ
- 3) キラリと光る小さなオリジナリティーを

IV レジューメのつくり方

- 1) レジューメはなぜ必要か
- 2) レジューメをどうまとめるか
- 3) レジューメにもいろいろある
- 4) レジューメをどう報告するか

V レポートのまとめ方

- 1) レポートとは何か
- 2) テーマをどう設定するか
- 3) レポートをどう構成するか
- 4) 議論の道筋をどうつけるか

VI レポートの文章の書き方

- 1) 文章をどう構成するか
- 2) 引用はしてよいのか
- 3) 資料の無断借用はダメ
- 4) 参考文献の目録をつける
注の付け方
引用の仕方
文献リストの書き方

VII 発表とプレゼンテーション

- 1) 自分の言葉で話す
- 2) 話し方の順序をどうするか
- 3) 発表用の文章をどうつくるか
- 4) 発表用の文書をどう組み立てるか
- 5) 発表用の文章作成の注意点

VIII 報告内容をどう議論するか

- 1) ディベートとは何か
- 2) ディベートをどうおこなうか
- 3) 審査をどうおこなうか
- 4) ディベート進行の具体的例
- 5) 本格的な取り組み方と準備
【付】採点表

〔資料〕 知っておきたい主な校正記号



2) 『Economic Affairs and Economics in English』(立教大学経済学部編)

Contents

はじめに

<準備編>

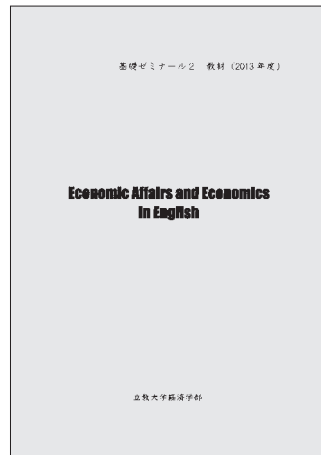
- Prep.1 経済学を学ぶ学生の皆さんへ【経済】
- Prep.2 研究大学の役割【環境】
- Prep.3 マクドナルドのオーナーは誰？【会計】
- Prep.4 教育【政策】

<本編>

- Ch.1 OPEC 【国際・理論】
- Ch.2 Trading Places 【政策・産業】
- Ch.3 Accounting Information 【会計】
- Ch.4 Obama's Inaugural Address 【アメリカ経済】
- Ch.5 Demand and Supply 【理論】
- Ch.6 GDP 【理論・統計】
- Ch.7 Media and Things 【経営・産業】
- Ch.8 Japanese Manufacture 【経営・労働】
- Ch.9 Immigration and Integration 【国際・政策】
- Ch.10 Kyoto Protocol 【時事・環境】
- Ch.11 Mad Money 【金融】
- Ch.12 Japan in Transition 【経済史・貿易】
- Ch.13 Market and State 【比較体制・政策】
- Ch.14 Money and Power 【政策・統計】
- Ch.15 Individualism 【思想】

Discussion Theme

1. College of Economics 経済学部で何をする？
2. Benjo-mesi 便所飯
3. TEPCO 電力会社と原発
4. Is Any Job Better Than No Job?
どんな仕事でも失業よりはマシ？



※網掛けはワークショップ当日の課題となったチャプター

15. 意見交換会

○家城 よろしくお祈いします。今日は経済学部の1年次の授業を見学させて頂きました。1年次後期ですので、見ていて初々しい感じがしましたけれども、なかなか、まだ入って半年で議論にはもうちょっとかなという感じなんですけれども、質問も随分出ていて、面白かったと思います。

まず最初に、授業の冒頭での出席票を使った工夫とか、やり方をいろいろ工夫されていまして、授業科目の背景なども含めて、少しご説明いただいて、それから議論をしていければと思います。

出席票の工夫

○関根 本日はお忙しいところ、たくさんいらして下さってありがとうございました。今日見ていただいた後期の基礎ゼミナール2は、英語のテキストを中心にした講読と議論という内容ですけれども、前期の基礎ゼミナール1は、日本語の文献を読み、8,000字という分量の多いレポートを一人一人に書いてもらって、それを中間報告、最終報告と1人2回ずつ、レジュメを使った報告とPowerPointを使った報告をしてもらうという内容でした (p.47 参照)。

出席票のカードの裏側に、氏名・日付と一緒に、自分が注目した新聞記事の記事名を書いてもらうというのは前期からやっております。これを始めたのは今年からなんですけれども、なぜ始めたかといいますと、やはり1年生で、なかなか新聞は読まないし、テレビのニュースなんか、ほとんど見ないという学生がまだまだ多いんです。そうすると、基礎ゼミナールのディスカッションの中でも、結局は知識がないために、議論の材料がないということが多くなります。それでシーンと、「お通夜みたいだね」とか言いながら、みんなでうつむいているということがよくあったものですから、このような取組みを始めました。それでも今日見ていただいたように、元気に議論するという感じにはまだなっていないんですけれども。

本当は1週間毎日、新聞記事を見て、1週間で一番注目した記事を選ぶということになっているんですけれども、見ていると、教室に来てスマートフォンで日経新聞の記事を検索して、ちょっと書きちゃおうかというのがチラッと見えたりすることもあります。逆に、本当に新聞の切り抜き記事を幾つも持ってきて書

いている学生もいます。そこはもう、機会を提供して、その機会をどう生かすかは学生に任せている状況です。

それでも去年に比べると、若干ですけれども、経済、社会、政治などに対する問題関心がちょっと出てきたかなと感じています。同じ基礎ゼミナールでも先生によっては、担当者を決めて新聞記事を要約させたりと、そこまでやっていらっしゃる方もいると聞いています。ただ、前期もそうなのですが、後期も一定の内容をカバーしてくださいというような決まりがあるものですから、時間的制約がかなりありまして、ちょっとそこまで私はできていない状況です。

科目の趣旨と授業の構成

後期について言いますと、英語のテキストには、たくさんのチャプターがあるんですけども (p.53 参照)、その中から各教員が選択して、少なくとも8チャプターを使ってくださいということになっています。今日ご覧いただいたように、英語の発音であるとか、全訳であるとか、かなり細かく、英語の授業っぽくやっているのは、基礎ゼミナールの中で英語を扱うことになった背景というのがあるからです。何年前かに、カリキュラム全体の中で、1年生が英語を学ぶ時間が、ちょっと減ってしまったんですね。その関係で、経済学部の基礎ゼミナールの中



経済学部 関根佳恵助教

で、それを補ってほしいということで導入されたという背景がありますので、それで英語の発音とか、そういうところまでやっているということです。

普段だと、英語のテキストの発音と訳の確認で30分ぐらい、残り1時間はディスカッションにあてるという形なんですけれども、今日は英語のテキストが1年生には若干難しかったということ、割と英語の分量があったということで、その確認に1時間を使ったものですから、全体を巻き込んだ議論になかなかならなかったのかなというところがあります。

あとやはり、今日は特にそうだったんですけども、同じ学生がいつも答えてしまうという点ですね。私の右に座っていた彼は、韓国からの留学生の方ですけども、大変学が意欲が高いので、いつもいろいろ調べてきて、ちょっとまわりが圧倒されてしまっているという感じがあるんですね。ですので、もう少し、何か彼が話したことに対してリプライをするという、こういうキャッチボールのディスカッションに本当はなるといいんですけども、それはまだ、ちょっとまわりの人が遠慮しちゃって、「ああそうですか、勉強になりました」みたいな、そういう調子があったので、やはり今日は学生が緊張していたのかもしれない。普段だと、狭い教室で、ちょっと冗談も言い合いながらやっています。

まだまだ、いろいろと改善の余地のあるゼミだと思っていますので、いろいろ



今日は皆さんからご意見やご示唆をいただければ、私としても、今後、授業を改善していく上で勉強になりますので、どうぞよろしく願いいたします。

質問1 班分けと役割分担

○**家城** 授業のなかで学生を3つの班に分けていますが、それぞれどのような役割分担になっているのでしょうか。

○**関根** 班分けをするというのは前期からやっていることなんですけれども、今のクラスは、登録が21名、前期から来なくなってしまった学生が2人おりまして、19名でやっています。

今週のような英語のテキストの講読の回は、まず、英語のテキストの全訳をして、その内容のレジュメを書いてくる。そして当日それを報告するという班が1つ。それから当日、司会をする人を1人出し、また同時に、英語のテキストの発音を調べてきて当日に英文を音読する、そういう班が1つ。残りの1班は、今日私の左側にいた班ですが、テキストに対して疑問点、論点を出す、という役割になっています。3つの班で、毎週ローテーションする形にしています。

前期も、私が名簿順で振り分けて、男女比があまりにも偏っているような場合のみ入れ替えたりして班分けを行いました。後期は班替えをして、それも私がもうランダムに決めてしまうんですけれども、それで新しい班になって、今の形で進めているという状況です。

今日は時間の関係でやらなかったんですけれども、ディスカッションで全く意見が出てこないときには、班に分かれていることを利用して、「じゃあ今から5分間、班の中で話し合ってください」というようなこともしています。

質問2 全訳の提出と予習

○**家城** テキストには、英文に加えて、日本語で「Topics」とか「【参考】」とか、結構詳しい解説があって、こんなことを勉強してきなさいというようなことも書いてありますが、レジュメをつくる中で、その都度、自分で調べてきなさいということも指示しているのでしょうか。

○**関根** 英語の全訳をするということだけで、学生は結構あっぴあっぴしているものですから、全訳とレジュメを出す班については、「質問を受ける側としての質問対策をしてください」と言うのですけれども、基本的に、どういう疑問点、

論点を出すかというのは、また別の班が出す、考えてくるということになっています。ただ、質問する側の班も、一方的に疑問を投げかけるだけではなくて、「じゃあ自分はどうか考えているのか意見を言ってください」と言うと、なかなか言えなかったり、「分からないから聞いているんです」みたいな、そうやって開き直ってしまうような感じで、そこはちょっとなかなか。

1年生は情報処理であるとか、ほかの専門の授業で大変ということもありまして、どこまで下勉強を求めているのかなというところはあります。質問対策をしてきてくださいとか、いろいろな質問を準備してきてくださいとか、できれば関連する新聞記事や本なども調べてくるようにといったことは、ある程度言っているのですけれども、なかなかそこまで学生はやれていません。これは授業の工夫次第で改善できるのかもしれないと考えています。

○**家城** 今日いただいた資料〔注：全訳を担当したB班が作成した当日レジュメ〕を、学生さんはどの段階で提出するのですか。

○**関根** 皆さんにお配りさせていただいたレジュメというのは、月曜に、私のゼミは毎週火曜日ですので、前日のお昼までに、インターネットのCHORUSというサイトがありまして、そこにファイルを添付して、私に提出するという形にしています。私のクラスでは、私が印刷をしています。

私のほうでは、授業までにこの英語の訳を下チェックして、添削しておかないといけません。それを伝えるだけでも長い時間がかかってしまったりするので、当日見て直しているのでは、時間が幾らあっても足りないということになります。

質問3 質問票

○**家城** さっき配られていた質問票というのはどういうものですか。

○**関根** 事務にあるリアクションペーパーを使っています。テキストを読んで、質問をする班がありますので、翌週、質問をする予定になっている班の人にその紙を配りまして、1週間かけてテキストを読んで、論点、疑問点を書くように指示しています。1人3つ以上と言っているんですけども、英語の意味が分からないとか、そういう、あまり内容に関係ないような質問も入って3つになってしまっています。それを1週間前に配って準備をさせています。

○**家城** 事前に配るのですね。授業の場ではなかなか質問が出ないからですか。

○**関根** そうですね。以前はそうしていたんですけども。そうすると、授業中

に初めて疑問点、論点を考えるので、時間がなくなってしまうということと、テキストを読んでこない学生がたくさん出てしまうんです。当日出てきた日本語訳を見て、「ここの意味がよく分からない」といったことを言うんですけども、ちょっと訳が間違っていると、間違っているところの意味がよく分からないとか、そういう質問が出てしまいます。そうじゃなくて、自分で、1週間も時間があるんだから、準備をしてくるようにという意図で、今年から紙を渡すようにしているんです。そうすることで、去年に比べるとだいぶ出てくる質問の質がよくなったかなという感じがしています。

○**家城** 有難うございました。今日はベテランの方も若手の方もたくさんいらっしゃいます。今少しご説明いただきましたけれども、何か疑問に思ったことなどあれば、ご自由をお願いします。

質問4 テキストの作成

○**質問者** 質問いいですか。この教材は全クラス共通で決められたものですか。また教材づくりがどのような目標でされたのかということと、学生に教材を選ぶ余地はあるのかということ。それと、授業自体は自動登録なのでしょうか、選択なのでしょうか。仕組みがよく分からないので教えてください。

○**関根** まず教材〔注：共通テキスト〕ですけれども、経済学部の1年生後期の基礎ゼミナール2は全クラスこれ（p.53参照）と決まっております、学生に選ぶ余地は残念ながらありません。教員にも選ぶ余地はありません。

このテキストは1年生向けによくできていると思います。経済学部の小林純先生が編集を担当されて、私が着任してからの3年間は、同じ教材を使っています。内容が若干古くなっていくものや、日本語訳が出ているものの中にはあるのですが、毎年つくるのは大変なので、これを何年かに1度更新をする、あるいは一部差し替えをしていくという形で、経済学部の教員が作っています。

学生なんですけれども、前期も後期も基礎ゼミナールは自動登録されています。でも必修ではありません。自分で履修しないという届け出をすれば、登録しないという選択もできるし、それで卒業もできるということになります。ただ、大抵の学生は、自動登録されているものに対してわざわざ「やりたくないです」という学生はいないので、ほとんど全員が自動的に受講しているということになります。

質問5 講読範囲の選定

○家城 チャプターを選ぶのは先生がされるんですか。

○関根 そうですね。どのチャプターを扱うかについては各教員に任されていて、一応8チャプターを読むということになっています。このテキストは、チャプターが全部で15ありまして、それに加えて準備編ということで、プレパレーションというものがついています (p.53 参照)。また最後に、4つのディスカッションテーマもついています。8チャプターと言っているんですけども、私はプレパレーションとディスカッションテーマを入れて、8つをやるという形にしています。

先生によっては、例えば1コマ90分のゼミナールの中で3チャプターをやってしまう先生もいらっしゃいます。そういう先生は、そこで全訳などはできませんので、学生が読んできているという前提で、中身について議論しましょうということやられているようです。そういうやり方ですと、あいた時間にほかの日本語の文献を読むことなども可能になって、そういうことをされている先生もいらっしゃると思っています。でも、そうすると英語の勉強を補うという科目の本来の趣旨から離れてしまうことにならないかなという考えがありまして、私のクラスでは1回に1チャプターずつということで、比較的ゆっくりやっております。

質問6 教員による介入のあり方と学生の英語読解力

○寺崎 調査役の寺崎と申します。お疲れさまです。今日拝見していて、難しいなあと思いました。例えば技術的なことと言うと、先生は一度も黒板をお使いにならなかったですね。あれは惜しいと思った。学生の論点が対立するところがあるでしょう。

○関根 はい。

○寺崎 足りないところとか、いろいろな論点も出てくる。それはやっぱり黒板を使って、むしろ先生のほうで整理されたほうが良いような気がするんですね。それと近いことですが、僕だったら、もっと学生の討論に介入しますね。介入したほうが良いと思います。また彼らは、非常におとなしいグループと、大変能弁な人と、今日は分かれていますね。あれはやっぱり、ちょっと調整しておく必要があるんじゃないかなという印象ですね。

それにしても、専門の内容を、外国語を使って学習するという、これは相

当難しいことなんだと改めて思いました。僕らの頃は、あの学生たちと同じ時期には、全部小説を読まされていたわけですよ、実は。全部、文学でした。今日のように専門じゃない。それだけに、彼らの語学力の問題がもろに出てくる気がするんです。例えば、今日配られた学生たちの訳を見てみて、「ああ、学生たちには分からないんだな」と思ったのは、「Just as in the 19th century」ってのがありますね。あれが何のことか分からないんです。事実を知らないから。

○**関根** そうなんです。

○**寺崎** それからその次の「may not be the whole answer」、あれも何のことか分からない。そういうポイントが抜けている。あれはどちらかという語学力の問題ですね。ですから、読解力がぐっと落ちているって、このごろは受験英語でいわれますでしょう。そこが印象的で、コミュニケーション力はあるが読解力はないと。そこにちょっと気をつけないといけないなというふうに思いました。

介入という点で、最後は、もとの記事の題の『Immigration Dilemma』とありますね。Dilemmaって何と何のDilemmaだろうと。そこに集中させていくような流れにしたほうが、分かるような気が僕はします。久し振りに思い出しました。テキストをみんなして一緒に読むことのきつさをね。



立教学院調査役、大学教育開発・支援センター 顧問 寺崎昌男

○**関根** ご意見ありがとうございます。そうですね、黒板を使いながら進めていたり、メモ用紙や付箋のようなものを書いてペタペタ貼っていたり、そういうことに関しては取り入れられていません。

討論に介入するという一方で、実はすごく難しさを感じていて、私は今年で基礎ゼミナール3年目なんですけれども、1年目、2年目、特に1年目は討論に相当介入していたんですね。ところが、1年生の学生に対して、私が討論に介入してしまいますと、介入の仕方がよくなかったのかもしれないんですけれども、「先生のお話を伺う」というような形にどうしてもなっていました。学生が逆に発言しにくいような雰囲気、あるいは、「自分たちが発言しなくても、黙っていれば先生が何か言って時間が過ぎていくだろう」という雰囲気で、ディスカッションが盛り上がるどころか、逆に静まり返ってしまうということがありました。当時の介入の仕方がうまくなかったのかもしれないんですけれども、そのかけんが結構難しいんですね。

ただ、学生に知識がなくて、明らかに間違っている議論をしているのに、「ああそうだ、そうだ」というふうにならずいて、そのまま「次の論点に行きましょう」みたいな話になりそうなときは、今日もちょっとあったんですけれども、そういうときには私が見ていて、「いや、実はね」というようなことを言うようにはしています。そのあたり、私もまだ経験不足で、いつ、どういう形で介入するか、なかなか難しいところです。

○**寺崎** そういうフォロー型の介入が普通でしょうけども。ときどきちょっと積極的に、深く考えるきっかけを与えるようなこともあっていいんじゃないかなという気がします。

○**関根** そうですね。

○**家城** 一番難しいですね。ついつい先生はしゃべりたくなるところがあるから、こっちはかりになっちゃうこともありますよね。共通の悩みなんじゃないかなと思います。

○**宮田** 参考になるかは分かりませんが、経営学部のBLP (Business Leadership Program) では、介入しますけど、質問でしかしない。答えは一切、教員からは言わないということでやっています。さっきおっしゃったように、アンバランスなときって本当にあるんですよね。1人ばかりが話して。SA (Student Assistant) が授業を進めるときも結構ありまして、そういうときも観察していて、

議論が偏っている場合には、わざと「ここ挙がってる？」とか。そういうように、バックで、かつ答えは一切言わないで質問だけで介入するということをしています。

○関根 ありがとうございます。

質問7 学部の初年次演習は英語学習を取り込めるか

○大森 ランゲージ・センターの大森と申します。我々は全カリの英語を担当しているんですが、確かにリーディング、読み込みの量が少ないのはすごく自覚しています。じゃあ、どういうふうにしてリーディングをやっていくか、やっぱり訳なんかをすると眠ってしまう学生がいるんじゃないかとか、いろいろ心配はあって、参考にさせていただきたいと思って今日は参加いたしました。

リーディング以外の点では、議論の仕方について、全カリの英語でも特に技術面から入り、どんどん発表して、質問していくという、そういう姿勢なり機会を多く与えているという点ですごく頑張っていると思います。慣れてくると、学生もすごくしゃべりたがって、英語であっても結構頑張って話しているんですね。それで、今日拝見させていただいた授業の目的を見ると、英語を学ぶのではなくて、経済学的思考及び批判的思考を訓練する、身につけるといことが目的です



ね。そこで質問は、全カリの英語でも批判的思考は教えている。一方で今日の授業のように、英語の読み物をしっかり読むことを目的としていて、あと議論もするととなると、全カリ英語とのすみ分けというか、その辺りを経済学部ではどのようにとらえられているのかなという点をお聞きしたいのですが。

○**関根** ありがとうございます。カリキュラム全体の編成に私が携わっていないものですから、ご質問のすみ分けの問題とかそういった点はお答えできないかと思います。ただ、今日やったところは移民政策というテーマだったのですが、ほかのチャプターだと、もっと経済分野の基礎的な言葉を対象に、英語のこういう単語は、日本語にするとこうなんだよといったことを教えています。そういう経済英語といいますか、経済的な文献に触れるという意味で、後期に英語のテキストを取り上げているという面があると聞いています。

ただし、後期に英語を必ずやらなければいけないということが、学生にとっても、先生にとっても負担になっている、あるいはちょっと縛りがきつ過ぎる、という議論があります。そもそも英語の授業が減ったために、それを補うための授業という位置づけだったんですけども、今、見直しをしようかという議論も、実は始まっているようです。そのあたり、どういうふうになっているか小泉さんから何かございますか。

○**小泉** 経済学部のキャリアサポーターをしております小泉と申します。本日はありがとうございます。関根先生からもお話があったのですが、経済学部では今、立教 GP を取りまして、三本柱の1つとしてキャリア教育を強化しているところです。その中でも、初年次教育と、その要となる基礎ゼミの強化にとりかかりましょうということで、今年の夏休みに、前期の基礎ゼミが終わった段階で、先生たち全員にアンケート調査をいたしました。質問項目はたくさんありますが、きちんと数値化して報告書にまとめて、基礎ゼミを担当している先生方と、あとは教授会でも配布をしまして、今こういうばらつきがありますよというのを課題として1つ挙げました。

前期でやっているのが輪読とレポートの書き方、レジュメの書き方などです。前期の部分というのはすごく大事で、その基礎を固めた上で、2年生の専門ゼミに進んでもらいたいということなんですけれども、今言っていたように、前期でやるのがたくさんあり過ぎて、「とにかくスケジュールがタイト過ぎる」という意見を21名中16名の先生からいただきました。「時間がなくて一人一人の

学生に対して満足いくフィードバックができない」とか、「学生がもうちょっと知りたい、疑問がある、という場合でもそれにちゃんと答えてあげられていない」ということで、先生としても消化不良の部分があるということでした。そのため、後期でやっている英語を少し短縮するか、もしくは英語は基礎ゼミから出してしまっ、英語をもっとやりたい学生向けの授業をひとつつづつ、前期の部分を後期までしっかり延ばしてやろうという案が、今実際にあがっております。これだけ先生からタイトだ、タイトだという意見が実際にあるので、これはおそらく整理されていくはずなんですけれども、急にできるものではないので、2016年度のカリキュラム編成の際に、そこからちゃんとスタートできるように、現在先生方と、私も一緒に入って議論している段階でございます。

質問8 一つの題材をどうやって掘り下げるか

○**質問者** 同じ経済学部の基礎ゼミナール2を担当しています。授業をやっている、後期の英語のテキストで、うまくいったと自分で満足した年がなく、学生に聞くと、英文が難しいと。このテキストは題材としてはすごくいいと思うんですが、細切れになっているので、だったら例えば今日の移民のところなんかも、前もって日本語でそれに関連する文書を読んで、その次の週に輪読して訳すという形でやろうと。このテキストには学習という項目があって、その中に関連テキストみたいなものが、3文献並んでいる。その中の一部をコピーして渡して、先に日本語を読んでから英語を読むというのを、去年から始めて今年もやってはいるんですが、やっぱり何かしっくりこないというのがあって、ほかの先生はどうやっていらっしゃるのかなと思ひまして、今日はこちらの授業を見学することになりました。

○**関根** 私は、この前のFDワークショップ〔注：本書第1部で報告した「協同学習のプロセスグループ・ワークで伸ばす問題発見、論理的思考、コミュニケーションの力」を指す〕で、4人ぐらいの小さなグループでディスカッションをするという授業を見学させていただきました。同じテキストを3週間ぐらいにわたって読んで、議論をして、個別のテーマについて、それぞれがテーマを持って調べてきて、それを報告してとか、かなり掘り下げてテキストを扱っている。しかも少人数のグループなので、恥ずかしがらずに自分の意見を言える。経済学部では結構制約があるといいつつも、何とかして小規模のグループ・ディスカッ

ションをもう少し組み入れていくとか、今おっしゃっていただいたような、1つのテキスト、テーマについて、移民政策であれば移民政策で、3週間は無理でも、せめて2週間とか、連続性を持って、テーマを掘り下げていくという形ができればいいのかなと。

ただ、今は8チャプター、全部違うテーマについて、14回の中でやらなきゃいけないというのがありますので、幾つかのテーマを選んで、今日の移民政策みたいな議論のあるところというのは、例えば8チャプターのうち3チャプターだけでも、2週間セットのグループワークでしますと、そういうことがやれるのかなと、今の話を聞きながら思いました。

これから後期の英語の講読というものの自体がどうなっていくかわからないんですけども、今後数年、来年、再来年あたり続けていく中では、そういうアイデアも、担当者の中で共有したり、意見として上げさせていただければと思います。

質問9 基礎ゼミナール担当者会議

○家城 担当者の間で議論されるような機会というのは、経済学部では…

○関根 年に3回ほどです。最初は4月の段階で。担当者が現在、経済学部の助教と、それから兼任講師の先生方を入れて、22人ほどいらっしゃいます。複数のクラスを担当している先生もいらっしゃって、クラス数は全部で30ほどです。まず、全員が集まるというのはなかなか日程調整が難しいので、前期は4月に2回、「どちらかの日程で担当者会議に参加をしてください」という形で、経済学部の教務主任と基礎ゼミナールの担当者が集まります。長い方は20年ぐらい、ずっと兼任講師で来てくださっていて、そういうベテランの先生からいろいろなアイデア、知恵をいただきながら、今年から新たに教えるという先生も一緒になって、情報の共有であるとか、それから、前期は特に「これを必ずやってください」ということが多いので、そういうところの共有ですね。成績評価の仕方であるとか、そういったことも最低限の共通化をはかっています。

後期に入るときにもう1回あって、さらに年度末のところで振り返りと、翌年に向けて改善すべき点等を話し合うということで、もう1回。だいたい毎年3回ほど出席します。

○家城 じゃあ8チャプターは取り上げるというのは、その担当者会議で。

○関根 そうですね。最初は10回だったんです。「14週の中で10チャプター

やってください、マストです」、みたいな感じだったので、それはあまりにもきつuitiということで、じゃあ8にしたら、みんなできるかなということで8になっています。それでも、なかなか8はきついし、学生も3パラグラフとか4パラグラフぐらいの抜き書きでは前後関係が分からなくて、読んでもどう議論していいのか分からないと。前期は、やることが多いなかで、結構いい感じできたのに、後期になって、「あれあれ？」と。英語が難しいということもあって、内容が理解できないことで議論にならないというところもかなりありました。そういうこともあって、見直しをしたほうがいいんじゃないかという声が出ています。

質問10 日本語による授業における原書テキストの活用

○孫 今日ありがとうございます。経済学的な思考を学びながら、同時に英語のトレーニングをすると大変さと意義について学べる非常にいい機会でした。基礎ゼミ1の輪読とかレポート作成とか、それらを後期まで延ばして、今のような形では英語をやらない、となった時に考えられる1つの方法として、経済学のミクロ、マクロなどの授業で使う教材の一部として、英語を取り入れるというのはどうでしょうか。もちろん日本語で授業をするんですけども、そこで、経済学的な知識と英語を両方学べるようなツールとなる英語教材を使って、両方を目指すという形です。別途のこういった基礎ゼミナールを設けるのではなくて、そういった試みというのはいかがでしょうか。

たぶん学生は「難しいです」と言うんですけども、テキストの準備編の1つ目にマンキューの教科書が載っていました。経済学の教科書というのは、翻訳された本に比べると非常に分かりやすいという見方もできるかと思います。また英語の教科書の全部を使うのではなくて、一部を使って、併用するとか、そういった試みというのがあるうと思いますが、いかがでしょうか。私は経済学部のカリキュラムについて詳しくないのですが、そういう考え方は出ていませんか。

○関根 専門科目を担当していないので、情報は不十分なんですけれども、ミクロ、マクロなどの授業の中というよりも、専門ゼミでは、例えば英語のテキストの日本語訳を輪読していて、人によっては一歩進んで原書で読んでいるとか、そういう形で一部、英語文献を取り入れているという話は聞いたことがあります。しかし、一般的な講義の中で英語の教科書を使っているとか、日本語の教科書を

使っていて、一部、「今日は英語のものを使います」とか、「この単語は英語ではね」というようなことをやっているという話は聞いていません。もし、基礎ゼミナールの中で英語の時間を減らしていくのであれば、そういう専門の講義の中で、例えば専門用語を、重要なポイントだけでも英語で教えていくとか、半年の中で1回ぐらいは英語の文献を扱ってもらおうとか、そういうことも全体のカリキュラムの中で、検討していったいいんじゃないかなと思います。

確かに最初のプレパレーション (Prep.1) のところで、マンキューの経済学の教科書の導入の部分、なぜ経済学を学ぶのかという話があるんですね。そういった部分は割と取り入れやすいのかなと。私も授業で取り上げて、比較的学生も理解しやすいし、授業もやりやすかったところです。

全体のカリキュラムを計画する立場にないものですから、あまり申し上げられることがないんですけども、英語と経済英語に慣れながら、経済学的思考を身につけるといって、基礎ゼミだけではなくて、カリキュラム全体のなかで、いかにバランスをとってやっていくのかという点で大変ご示唆を頂きました。ありがとうございます。

質問11 英語教材で何をさせるか —音読と全訳について—

○**牧田** 21世紀社会デザイン研究科の牧田と申します。大学院なのですが、英語を教材に使ったりしています。大学院でも、やはり英語を使った授業をするというのは難しいことで、大学生だったらどんな感じなのかなと考えていましたが、やはり大変なんだと改めて実感しました。1つお聞きしたいのは、音読させていらっしやいますよね。

○**関根** はい。

○**牧田** 大学院では音読はさせていないんですけども、やはり帰国子女の方でもない限り、英語の発音には、みんな自信がないので、やっぱり20人ぐらいの中で音読するというのは、ちょっと勇気が要するというか、大変だと思うんです。聞いている学生さんも、同級生が音読しているのを聞いているのはあまり意味がないような感じがします。このくらいだったら、すぐ立教大学の中の先生に録音していただいて、チャプターごとに、ネイティブの英語を聞いたほうが、そこで知らなかった発音も確認できるし、同じ時間だったら、同級生の発音を聞くよりいいんじゃないかなと。そのほうがちょっと刺激も入るし、英語を使う授業とい

う点で、いいんじゃないかなと感じました。

また私自身も高校時代のときに英語を勉強するというと、日本語に訳す、まず訳してみるという、そういう勉強の仕方だったわけですがけれども、ただ、翻訳家にならない限り、英語が分かればいいんですよね。日本語にしないと内容が理解できない頭というのをつかっていくと、社会に出て英語を使うという状況で、逆にマイナスになってしまうのではないのでしょうか。英語学科でもないし、そんな正確な翻訳はできなくても逆にいいんじゃないかという感じがしました。

ポイントを選んで、このテキストを読んでどういうことを学んだかという要約ですね。それをプレゼンしてもらえそうな形はどうでしょうか。学生にプレゼンさせると、PowerPointで図式化したり、あるいは比較してくれたり、そのぐらいまでやってくれる人もいます。「テキストの内容の要約をプレゼンしてください」というふうにもっていくのも一つの方法かなと、必ずしも日本語にしなくていいんじゃないかなと私は思いました。

そして、テキストの英語が難しいということであれば、本文といいますか、そういうところは日本語で、例えばキーワード、今回でいえば社会統合政策とか、1つキーワードがありますね。経済学の需要と供給とかでもいいんですけど。キーワードの、そのディフィニションのところだけを英語の経済辞典から持ってきて、



そこだけ英語でしっかり熟読するとか、そういう形で英語を経済学の中に入れていくという方法もあるんじゃないかなと感じました。

今日は大変参考になりました。ありがとうございました。

○**関根** 本当に貴重なご意見をありがとうございます。ネイティブの発音を録音させてもらうということなんですけれども、とてもよいやり方だと思います。ただ、音読を私のクラスであえてやっているというのは、ほかに英語の授業があるとはいえ、英語に苦手意識を持っている学生が多くて、よっぽど自分で関心を持って訓練している学生を除けば、ほとんどの学生にとって、英語を発音する機会は全くないんですね。その中で、もちろん聞く耳を養うというのも大事なんですけども、やっぱり自分で発音しようとしないと、どこにアクセントがあるのか、どういう発音をしたらいいのかというのが実際分からない。今日もいっぱい間違えていましたけど、そういう学生がほとんどなんですね。学生たちにとって、時間を取って、強制的にやらなきゃいけないという場所に置かれることは、大学4年間でもなかなかないと思います。

そういう意味では、私が持っているクラスの中では、分からない発音や単語があれば、発音記号もアクセントも調べて、家で練習をしてきて読んでくださいということで進めています。確かに時間も取りますし、ほかの学生の発音をなぜ聞かないといけないのか、というのもあるかもしれないんですけども、まず発音する本人にとって意義があると思います。

私は自分が学部生だったときに、英語の輪読の際に、発音をしていました。とてもただどしく、私は読むのが苦手で、すごく苦手意識があったんですけども、そういう過程があったから、今は英語がしゃべれるようになっていて考えています。これが正解かどうかはちょっと分かりませんし、限られた時間の中ではあるんですけども、そういう考えで、あえてやっているというのがあります。

それから、全訳する必要はないんじゃないかという点ですが、これもクラスによってさまざまです。例えば、先生がおっしゃってくださったように、レジユメだけであるとか、レジユメもつくらずにそのままディスカッション、というところもあると聞いています。あえて私のクラスで全訳させている理由なんですけれども、学生にレジユメを書いて持ってきてもらうと、全訳で見ただけだと分かるように、訳が全然取れていないんですね。訳が全然取れていないところから

レジメにしてディスカッションしようとする、全く意味の取れていないレジメをもとにディスカッションをしなければいけなくなってしまって、本当にわけが分からないという状況で、日本語になった間違ったレジメをもとに質問などが出てきます。そこで結局、英語の文章に戻って、レジメのもとの文章はここで、この意味はこうでということ、またたどっていかなければいけません。

○**牧田** 意味が理解できていないということですね。

○**関根** できていないです。残念ながら。

○**牧田** 訳すということによって理解ができるのでしょうか。日本語に翻訳できたということは、イコール理解できたということになるのでしょうか。

○**関根** 私はそう思っています。意味の通る日本語にする。少なくとも私がここ数年やってきた中では、やはり日本語にうまく訳せていない部分というのは、英語も理解できていないというケースが多かったものですから、あえて全訳をさせています。そうすることで、議論をするときも、「何パラグラフの何行目で言っているこの言葉は」というふうに議論ができます。もちろん、訳し間違っているのに日本語らしくなっているケースもありますし、時には意識をしたりということもあるかと思います。これも正解かどうかは分かりませんが、いろいろなやり方があるんだと思うんですが、今申し上げたような考えがあって、こういう形にしています。

○**家城** 関根先生、本当にお疲れさまでした。お聞きしていて、随分いろいろな苦労があるなど実感するとともに、大変勉強になりました。本日は、関根先生、ご出席の皆さん、本当にありがとうございました。(拍手)

参加者の声 1

大森 愛 (ランゲージセンター教育講師)

今回、関根佳恵先生の1年生を対象とした「英文教材を用いた経済学的思考の訓練—経済学部「基礎ゼミナール2」の取組み—」の授業を見学させていただきました。そもそも参加しようと思った理由は二点あります。一点目は、全カリ言語教育の一環で英語科目を担当しているものとして、専門科目の授業で英語のリーディング教材をどのように用いて授業を行っているのに関心がありました。二点目は、事前案内で「授業では内容の確認とディスカッションを行う」とありましたので、英語科目で力を入れ実践している「ディスカッション」とどのように類似あるいは異なるのか確認したかった点にあります。

今回の授業では、学生は事前に指定教材を読んで授業に参加し、多くの時間をかけて丁寧に訳読を行いました。その後、リーディングの内容を基に日本語で行う質問やディスカッションの時間が設けられていました。学生は、あらかじめ決められているグループ単位で質問をしたり、それに答えたり、あるいは司会を担当するなどしてすべての学生が参加する仕組みになっており、先生の工夫が見てとれました。

授業見学後の意見交換会では、授業の進め方について多くの意見や指摘がありました。クラスルームマネジメント、板書の活用方法や読解教材の扱いはその一例です。そのような質問や指摘に対して実践の背景にある関根先生のお考えや今までの試行錯誤を伺い、見学した授業の実践を一層理解することができました。

意見交換会であがったその他のコメントで、英語の教材を使用し、なおかつ学生がそれを理解した上で専門分野の授業を進めることの難しさを再認識したという感想がありました。難しさの理由の一つとして、専門分野の知識習得や議論により多くの時間を割きたいものの、学生が英語のリーディング教材を正確に理解できていないためどうしても訳読に多くの時間を取られてしまう状況があると私は理解しました。この状況を改善するためには、リーディング教材を増やして学生の語彙力・読解力を高める活動を一層授業に取り込むべきなのでしょうか。英

語科目で取り組めることは何なのかという疑問が浮かびました。

また「ディスカッション」方法に関してですが、学生は全カリ言語教育（英語）の必修科目である「ディスカッション」と「プレゼンテーション」を1年生で履修しています。これらの授業で、学生は自分の意見を述べ、さらに議論をより活発に進めるための質問や意思表示の方法についてまとまった時間を費やし学習・訓練しています。英語で行っていますが、慣れてくると学生同士で積極的な意見交換が展開されます。専門科目では、英語科目ですでに学生が学習しているスキルを前提に、さらに議論する力と思考力を伸ばしていただくことが可能ではないかと思いました。

最後に、担当する授業は異なりますが、今回の授業見学と意見交換会を通して、立教大学のカリキュラム全体を考えながら、その一端を担う役割について考える大変貴重な機会となりました。授業を公開してくださった関根佳恵先生をはじめ、企画・準備してくださった大学教育開発・支援センターの皆様にご感謝申し上げます。

参加者の声 2

小澤 康裕 (大学教育開発・支援センター副センター長、経済学部准教授)

経済学部の1年生向けに開講されている「基礎ゼミナール」は、前期の「1」と後期の「2」に分かれている。担当教員も受講者も1年を通じて同じ構成となっており、学生にとっては帰属意識の強い、「居場所」となる授業である。前期の「1」では、基礎的な経済文献の輪読、ディスカッション（議論）、レポートの作成とプレゼンテーションなどを行い、後期の「2」では、経済に関する共通の英語テキストの輪読と議論を行っている。

経済学部に入學してくる学生は多様だが、大半は日本で教育を受けてきているため、20人程度の人の前で話す経験はあまり持っていないという共通点がある。その学生たちにプレゼンテーションや議論を経験させることが、「基礎ゼミナール」の担当教員に課せられた使命である。「授業では先生のおっしゃることを静かによく聞きなさい」と教えられてきた学生たちに、「どんどん発言しなさい」とけしかける、全くの逆の指導をしなければならない。しかも「経済」という得体的のしれないものを題材にして授業を行わなければならない担当教員の苦労は計り知れない。高校までの「授業を受ける」という受け身の姿勢から、「授業に参加する」あるいは「授業を創る」という積極的な姿勢に変えるために、凝り固まった肩をじっくりと手でほぐすように、徐々に徐々に打ち解けさせ、より活発な、そしてより深い議論へと導いていく、そんな授業が「基礎ゼミナール」には期待されている。

今回は、その一端を拜見しようということで、「基礎ゼミナール2」の授業を見学させていただいた。経済に関する英語教材を翻訳し、理解し、議論するという内容であった。期待通りに活発で深い議論が行われているかということ、なかなか現実はそのとはいかない。活発で深い議論をするためには、教員と学生の努力に加えて教材の質も要求される。今回見学させていただいた回では、それぞれにまだ改善の余地があるように思われた。

第一に、教材の質である。端的に言えば、学生のレベルに教材のレベルが合っていない。実は筆者もこの「基礎ゼミナール2」で使われている英語教材の開発

に関与しているので、これは筆者自身の反省点でもある。英語という言語のハードル以前に、日本語で同じ内容の教材が与えられても、学生には難しい可能性がある。日本語で読んでも難しいものを英語で読み、その内容について議論するには、超えるべきハードルがいくつもあり、残念ながら、学生が途方に暮れる様子が目に浮かぶ。専門性の高い英語の読解とそれを題材にした議論の両方を、同時に行おうというのは、そもそも欲張りなのかもしれない。

それでもなお、第二に、学生の努力、すなわち事前準備の不足が、活発で深い議論の妨げになっていることも指摘できる。学生にとっては険しく高い山に見えたとしても、時間をかけて教材を理解し、関連する文献を探すという努力がいつそ期待される。経済学部の学生として、経済社会についての知識や見聞を少しでも広げるチャンスととらえて、果敢に挑戦してほしい。一人がその努力を始めると、それに気づいた他の学生も努力するという良い波及効果が見込め、その波及効果が増幅されていく。つまり、お互いに高め合うことができる。これがゼミナールという少人数教育の最大の利点ではないだろうか。

第三に、教員として、議論を活性化するためにできることがまだあるのではないか。たとえば、意見交換会で関根先生や他の先生方がおっしゃっていたように、日本語で関連する新聞記事や雑誌記事などを事前配布する、学生にとってつまずきやすい点を予め指摘し、解説しておくなど、学生の理解を補助する工夫が可能であろう。また、授業中に意見が出やすいように、まずは小グループで議論させてその結果を代表者に発表させる、あるいは、教員が積極的に議論に介入し、時には教室を歩き回りながらどんどん指名して、少しでも発言させて、それを拾い上げつつ議論を深めるということも考えられる。

そこで教員は、「活発で深い議論をするために何をどこまでコントロールすべきか」という悩ましい問題に常に向き合うことになる。その点では、筆者自身も答えは見いだせていない。今回の授業見学のような貴重な経験を基に、小さな工夫を積み重ね、試行錯誤を経て、より活発でより深い議論へと学生を導くことができれば幸いである。

最後に、「授業見学」の機会を与えていただいた関根佳恵先生と学生のみなさんに、心から御礼申し上げたい。

おわりに

大学教育開発・支援センターFDワーキンググループでは2009-10年度に授業見学ワークショップを実施し、その成果を大学教育開発研究シリーズのNo.11、14に「アクティブな学びをデザインする」として刊行している。本冊子はそれに続く第3弾となる。前回の授業見学の対象は比較的大規模な授業であり、そのなかで学生の授業への参加意識を高め、双方向性を持たせるにはどうすればよいか、という点が興味を中心であった。今回、授業見学を交えたワークショップを3年ぶりに企画するにあたって教員アンケートを実施したところ、低年次や演習科目での工夫などについて関心が高いことが判明した。そのため第3弾では少人数の初年次演習科目の実践例を取り上げることとなった。初年次教育は当センターでも2007年度にシンポジウムを開催し、本シリーズでもNo.5、6で紹介するなど学内外で既に多くの議論がなされてきている。この間、2012年の中教審答申においては「プログラムとしての学士課程教育」という考えが強調され、また、立教大学においては2016年導入に向けて準備されている学士課程統合カリキュラムの議論でも導入期教育での「大学への着地」「大学での学びへの順応」の重要性が強調されており、関心はさらに高まっていると思われる。今回見学した科目は「協同学習」「英語教材を用いた基礎ゼミナール」という特徴もあり、多くの教職員の参加のもと、ワークショップでは熱心な議論が展開された。

参加者の関心は主に科目の運営と授業の運営の2つに分かれた。少人数で実施される基礎演習（ゼミ）の科目は共通教材を用いて標準化された方法で実施されることが多い。科目を統括する教員や共通テキストの選定・執筆にあたった教員も交えて、カリキュラム全体の中での学習成果の位置づけや科目の構造化・体系化の考え方、また、使用テキストの選択、時間配分の方法など具体的な点について意見交換が行われた。より関心が高かったのは授業運営での工夫に関するものであった。学生の参加度、学習意欲を高めて発言を促すための場の設計、仕掛けにいくつかの工夫が見られた。グループ（班）の分け方と役割分担、予習・復習に関するルール作り、授業内での時間配分など参考になる点も多かった。教員の関与・介入のあり方や黒板等のツールの使用方法などについても示唆に富む有意

義な意見交換があり、参加した教員は多くのヒントが得られたのではないだろうか。

最後に授業を公開して貴重な機会を提供していただいた高先生、関根先生、および熱心に議論に参加していただいた教員の皆さんに改めて感謝したい。FDワーキンググループでは来年度以降も引き続き授業見学ワークショップを開催する予定である。次回も多くの教職員が参加されることを期待している。

大学教育開発・支援センター TL部会 FDワーキンググループ座長

理学部長

家城 和夫

●大学教育開発研究シリーズ バックナンバー

- NO.1** 外から見た立教大学
—ミッションと社会的要請— (2006年)
- NO.2** 「学生による授業評価アンケート」にもとづくRIKKYO授業ハンドブック
—学生の積極的な学習を励ますために— (2006年)
- NO.3** 変化する高校生と大学への期待
—高校から見た立教大学— (2007年)
- NO.4** わが大学・わが学部の教育改革を語る
—学生の学び力、選ぶ力とカリキュラム— (2007年)
- NO.5** 立教大学の初年次教育とその展開
—〈勉強〉から〈課題探求型学習〉への道— (2007年)
- NO.6** 学生が見た立教大学の初年次教育
—今後の充実に向けて— (2008年)
- NO.7** 立教大学の今後と中教審の審議
—学士課程教育の再検討と将来を考える— (2009年)
- NO.8** バージニア工科大学視察報告
—米国における先進的な教育改革の事例に学ぶ— (2009年)
- NO.9** 立教大学における学習支援と図書館 (2009年)
- NO.10** 立教大学におけるアドミッション・ポリシー (2010年)
- NO.11** アクティブな学びをデザインする
—4つの授業をめぐる対話— (2010年)
- NO.12** グローバル化に対応する大学教育の在り方
—東アジアの高等教育における質改善への取組に学ぶ— (2010年)
- NO.13** 大学生の社会的・職業的自立に向けた教養教育の在り方 (2011年)
- NO.14** アクティブな学びをデザインする vol.2
—学生の気づきを促す3つの対話— (2011年)

NO.15 学位取得へ導く大学院教育のあり方
—博士後期課程を中心として— (2012年)

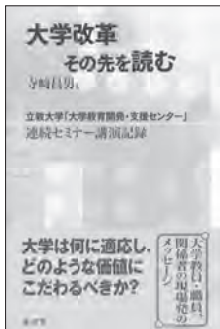
NO.16 日本の大学に求められている国際通用力とは (2012年)

NO.17 学びが高まる学習環境とは
—ハード、ソフト、コミュニティー— (2013年)

NO.18 大学院研究指導への誘い^{いざな}
—海外マニュアルの紹介— (2013年)

NO.19 「読む」学生が育つ大学教育を求めて
—若者の読書実態と授業実践を始点として— (2013年)

●連続セミナー講演記録



寺崎昌男『大学改革 その先を読む』(2007年)
東信堂 ¥1,300

授業担当者

第1回 高 みか (異文化コミュニケーション学部助教)

第2回 関根 佳恵 (経済学部助教)

2013年度FDワーキンググループ

家城 和夫 (ワーキンググループ座長、理学部長)

小澤 康裕 (副センター長、経済学部准教授)

谷村 英洋 (センター学術調査員)

御手洗 明佳 (センター学術調査員)

浜島 幸司 (センター学術調査員)

寺崎 昌男 (センター顧問、立教学院調査役)

今田 晶子 (センター課長)

上原 裕輔 (センター職員)

佐藤 百恵 (センター職員)

大学教育開発研究シリーズ NO.20

アクティブな学びをデザインする vol.3

—2学部における初年次演習科目の実践から—

2014年3月発行

発 行

立教大学 大学教育開発・支援センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

TEL : 03-3985-4624 FAX : 03-3985-4615

<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/>

e-mail : cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

制 作

株式会社アクセスリード

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-15-1 渋谷クロスタワー 24階

TEL : 03-5774-2330 FAX : 03-5774-2339



RIKKYO UNIVERSITY